
blackboy・familiar ~ 黒衣の使い魔 ~

真野 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

blackboy・familiar 黒衣の使い魔

【Nコード】

N3588Q

【作者名】

真野 優

【あらすじ】

これは、魔法の確立された数十年後の地球と、異世界とのお話。同じ学校に通う、新宮と平賀。ある日二人が授業をさぼって屋上で昼寝していると、突然魔法陣が出現し、二人を飲み込んだ。もちろん、爆睡していた二人のこと。気付かずにそのまま、飲み込まれてしまった。そして着いた先は、よくある展開だがなんと異世界！自分たちを召喚したのが、なんと貴族の少女。三年間の学院生活の中でのドタバタや、その後元の世界に変える方法を探すお話・・・にはなりませんね。当然、厄介事に巻き込まれていく二人・・・

いや、三人。さてこの先、どうなるのやら。

キャラクター紹介

〈キャラクター紹介〉

名前・レイ・ニイミヤ（新宮 怜）

性別・男

種族・人間

特徴・黒目黒髪

小柄

痩せ形

鋭い目

特技・魔力吸収

魔術創作

技能・魔法全般（????クラス）

剣技

体術

戦略

性格・冷静

頭脳明晰

寡黙

得物・魔剣《追憶の剣》

一言・「俺の敵なら早くかかってこい！なんだ・・・ただの読者か」

名前・シエルⅡエミリアⅡルイⅡネルグランド

性別・女

特徴・金髪金眼

天然バカ

容姿端麗

特技・天然ボケ

技能・魔法（Eクラス）

性格・お気楽

優しい

奇妙

好戦的

賢い

得物・オリハルコン製の杖

使い魔・カケルⅡヒラガ

一言・「読んでほしいとは言わないけど、読まないと怒るわよ」

名前・カケルⅡヒラガ（平賀 翔）

性別・男

特徴・黒髪黒目

天然パーマ

特技・ノリツツコミ

適応能力

技能・魔法（Bクラス）

剣技

性格・底なしに明るい

ツツコミ役

いじられキャラ

頭悪い

得物・双剣（青蝶・紫蝶）

主人・シエルⅡエミリアⅡルイⅡネルグランド

一言・「よつしゃ！俺の活躍を「作者さん、終わっていいよ」ちよいまでこらあ！人が話してるのに割り込むな！」

以上、メインキャラの紹介でした。

第一話　さらば現世（前書き）

はじめまして。

連日投稿は無理ですが、楽しんでいただければ幸いです。

オリジナルということで投稿させていただいていますが、某雨シリーズとか、そういう自分の好きな作品の設定やストーリー、セリフが入っていくこともありますので、お許しください。

現在もう一作書いているため、更新速度がどうしても遅くなりますが、読んでくださるとありがたいです。

ここまで来て見捨てる気になった方、多いに賛同できるのでパソコンなら左上の↑を、携帯ならクリアボタンをどうぞ。

それでも残ってくださっている方のために、第一話——開幕です！

第一話　さらば現世

<地球 said>

時は二〇八九年。

魔法というものが開発されて、およそ七十年が経過した。

魔法の行使に必要な、魔力というものは遺伝によつてその量や質が変わるらしく、必然的に「魔力量の多い家系」「魔力の質がいい家系」というのが出てくる。

もちろん、魔法の才能がなければいけないのだが、世の中魔力を持っているもので、魔法が使えない、なんて言う人はごくわずか。つまり、強い家柄と一般家系というような差が生まれたことになる。

新宮家はその強い家柄の中でも、トップクラスの実力を持つ。

そして、今新宮家の次期当主候補の三人姉弟がいる。

それが長男の大和、長女の咲音、次男の怜。

大和は魔法の才能がずば抜けて高く、咲音は魔力量が物凄く多い。そして、怜は頭はいいものの、他の二人よりは魔法に関する能力は高くなかった。

兄の魔力量と、姉の魔法の才能とを受け継いだらしい。

三人目だけあつて、魔法の才能も魔力の量も高いのじゃないか、と期待されていたらしく、怜の魔力量を測定し、その結果が兄と同じくらいだった時には、もう半分ぐらい見捨てられたも同然だった。学校には通えたが、そこで教わった魔法も兄みたいに高度な技は使えず、今度こそ完全に見捨てられた。

中学に上がるころには、もう授業はさぼる、親の言うことは聞かない、友達も少ないというような状況になっていた。

いくら見捨てられたとはいえ、もとは新宮家。他の生徒よりは魔法が使えたため、いじめられることはなかった。

彼の唯一の能力は、まだ兄や姉ですら知らないような魔法を、本で読んで知っているということ。

そして魔法の才能を補うかのように、剣や刀、柔道や合気道、そういった物の訓練をしていた。

もちろん、魔力の量は個人差はあるものの、一定量ずつ修練によって増えていくものなのでそれも欠かさなかった。

さらに暇さえあれば魔法関係の本を読み、十歳になるころには兄や姉を上回る知識を持っていた。

ただ、それを新宮家の人に話す気はなかったし、自分に優しく接してくれた兄と姉以外、自分が大人になったら滅ぼすと決めていた。そして、追い打ちをかけるように怜に悲劇が起きた。

それ以来、怜はさらに心を閉ざしてしまった。

唯一の親友、平賀翔以外、に友人はおらず、学校もさぼりがち、学校に行っても教室を抜け出して屋上にいる。

喧嘩を売ってきた人間に対する反撃も前より苛烈になっているため、次第にちよっかいをかけてくる奴も減っていき、本当に孤独になってしまっていた。

そんな、悲劇から一カ月がたったある日のこと。

いつも通り怜が屋上に行くと、そこにはもう先客がいた。

「おう、怜。今日もサボりか？」

「・・・何でお前がここにいる？そして今お前も現在進行形でさぼ

っている最中だろ」

そこには、翔が枕を持参して寝転がっていた。

ゆっくりと、隣に腰を下ろす怜。

「いいじゃないか、たまには。——なあ、最近ずっと落ち込んで
いるみたいだが、どうしたんだ？」

「別に・・・落ち込んでなんかないさ」

怜もいつの間にか横になっていて、珍しく雲ひとつない、初夏の
空を見上げている。

「そうか、ならいいんだ、じゃあ俺ちょっと寝るわ。学校終わった
ら起こしてくれ」

「・・・俺もこれから寝るところだ」

そう答えたのが聞こえていたのか否かわからないくらい素早く、
すでに翔は眠りに就いていた。

「・・・早いな、おい」

そして、つぶやいた怜本人も、ゆっくりと目を閉じた。

その時、二人を中心に、屋上に青色の魔法陣が展開した。

——日本のものではない、特殊な魔法陣が。

そして魔法陣が、青色に一回激しく輝くと、そこにはもう二人の姿はなかった。

第二話『俺は何者にも従う気はない。だから、却下だ』

<シエル said>

「zzzzzz」

正直に言おう、私は今ものすごく腹を立てている。

普段はここまでめったに怒らないっていうぐらい。

たぶん、父親のくせに私を口説こうとしてきたあの変態親父にキレた時ぐらいだろう。

理由？それは、今私が通っている、サンクアル魔法学院の一年生として、一番初めに受ける魔法学習の内容、『サモン・ファミリア』の儀式で、召喚されたはずの私のファミリアが、なんとこの世界ではめったに見かけない黒髪黒目の男子二人で、見慣れない服装をしているものの、精霊でも魔獣でもなくただの人間、しかも召喚されたのにも気づかず、爆睡中！

周りからは思いっきり笑われるわ、貴族のファミリアらしく火蜥蜴^{ダイ}とかを期待してたのに、ただの人間だっただけで物凄く屈辱的だし、しかも普通一匹のはずが二人もいるものだから、どっちが私のかかわらないという点も混乱を煽っている。

「とりあえず・・・起きやがれええええええええええ！」

私が使える、風と水の属性の攻撃魔法、ウインディ・カッティング。

本来なら、竜巻のように風が上空まで回転しながら連続的に遅い
かかり、相手を切り裂くはず。

だけど私が使つと、普通に敵を一〜二回、風の刃が切るだけの魔法
法になってしまう。

中級魔法の威力はあるはずなのに、最底辺の下級魔法以下の威力
になってしまうのが私。

しかし、人の目を覚まさせる程度には役に立つようで、小柄な方
の少年が、寸前で飛び上がり、風の刃を回避する。

ただ、もう一人の髪型が変な少年の方は、まだ爆睡していたため、
そのまま魔法の直撃を食らった。

「zzz・・・zzz」

「まだ寝とるんかい！ある意味すごい！」

柄にもなく、私は思わず叫んでしまった。

「いやいや、あれは死にかけで気絶してるだけだ。ほっとけ」

「ほっとくなあ！」

「あ、起きた」「

小柄な少年が何やらひどいことを呟いたら、それに反応して変な
髪形が起きた。

「やれやれ・・・ってかここどこ?」

「俺は知らん。・・・もつとも、この辺にいる生徒らしき人たちが知ら知ってるんじゃないか?そして誰だ?いきなり魔法攻撃なんか加えてきた奴は。相手になってやるが?」

いきなり小柄から放たれたプレッシャーに、いささかビクツとするも、私はゆつくりと手を上げていった。

「あ、それは私。あんたたちは、サモン・ファミリアの儀式・要するに、使い魔の召喚のことね。それで呼ばれたんだけど、どっちが私のファミリアになるのかな?」

私としては、極力穏やかに話しかけたつもり。

「知らん」

しかし、小柄の返事は実にあっさりしたものだった。

「そもそも何だ?人が気持よく寝てるところを邪魔するなんて、無粋じゃないか」

「それはすみません。じゃあどちらかが私と契約を結んでほしいんだけど、どっちがする?」

「面倒だから却下だ。さっさと戻せ」

途端に辺りがざわつく。

今まで召喚されたファミリアが契約を拒むことなんてなかったからだ。

その場合はそのファミリアがよほど強いか、もしくは術者が異様に雑魚なのかのどちらかになる。

この国の魔法使いの象徴である金髪は、そのまま貴族の特徴にあてはまる。

つまり、綺麗な金髪であればある程、純血の貴族に近い、ということになり、それは魔法の強さに通じる。

だから漆黒の髪の持ち主なんて、魔力は0に等しく、私たち貴族から見れば魔法の使えないただの庶民。

そもそも人間がファミリアとして召喚されたこと自体異例だが、魔法の使えないものがそこまで強いとは思えない。『召喚した私が雑魚い。』とつながるのだ。

私自身、今かなり落ち込み中だ。

「私の方が先に死んでしまった場合は、ファミリアは解放されます。ファミリアが人間の場合は分かりませんが、少なくとも普通はそうです。よろしければ名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

私が尋ねると、本当にいやいやながら小柄が口を開いた。

「……レイ。レイニイミヤだ。こっちがカケルニヒラガ。おま

えは？」

「私はシエルⅡエミリアⅡルイⅡネルグランド。名前の通り貴族よ」

「そんなこと言われても俺は知らん。で、本当に帰る方法がなくて、一生ここで過ぐせというのか？」

二人とも、かなり変わった名前だ。

そしてなぜかめちやくちや嫌そうである。

普通、ファミリアが召喚した術者のそばにいることを嫌がるなんてまずないんだけど。

「そうなるわね・・・嫌かしら？」

「当たり前だ。使い魔とやらは、何か？おまえの従者や護衛みたいなことをやらされるってわけか？」

「そうよ、引き受けてくれるかしら？」

「ふざけるな。俺は何者にも従う気はない。だから、却下だ。それに一生をお前なんかの従者で終わらせる気はない。こいつでいいんじゃないか？」

レイと名乗った少年が、カケルという少年の首をつかんでこっちに投げてくる。

「別にいいけど、カケルは何か特殊な力とかあるの？」

「ないな」

その三文字の返答を聞いて、私はさらに落ち込んだ。

これから、使い魔とペアで模擬戦をさせられたり、クラス対抗のチーム戦をさせられたりと、使い魔の力はすごく大事なのに・・・

「じゃあ、魔法は使える？」

「・・・何でおれに聞く？本人に直接聞け」

全く話をそらされてしまった。

しかも本人は腕を組みながらあさつての方向を向いており、これ以上何もしゃべる気がないという雰囲気だ。

「あー、俺一応魔法使えるよ」

そこで床に放置されていたカケルがようやく口を開いた。

「本当っ？どんな魔法が使えるの？」

「口で説明するのも大変だし、実演してあげてもいいけど・・・ここどこ？」

「じゃあお互い説明は後で寮に帰ってからってことでいい？そろそ

る授業も終わり」

カケルが無言でうなずいた瞬間、それを確認したメルフィン先生が、私たちのところに近づいてくる。

いよいよ契約だけど、他の生徒たちはとくに済ませて、自分のファミリアと戯れているか、情報交換をしていたり、こっちを眺めていたりしている。

落ち着け・・・契約に失敗とかはないんだから。

よく魔法を失敗させる私だけど、今回は先生がやってくれるんだから大丈夫。

「『汝、この・シエル』エミリア』ルイ』ネルグランドに仕える気はあるか?』」

「えーと、『あります』って言わなきゃならないんだろうね、これは」

「『汝、このファミリア、カケルをパートナーに迎える気はあるか?』」

「・・・あります』よー・・・」

本当ならやり直して他のファミリアを呼び寄せたいが、それはできない。

いやだろぅがなんだろうが、レイがきつぱりと断った以上、カケ

ルと契約を結ぶしかないのだ。

この時の私の顔は、ものすごく不機嫌だったと思う。

「『では、両者ともに握手をしてください』」

本当に嫌々ながら、私は手を差し出す。

カケルも若干あわてながらその手を握る。

「『ここに、新たなファミリアの儀式を完結させる。ファミリアに主の魔力を分け与えよ』」

私の中から少くない魔力がつながれた手を通って、カケルの方に流れていく。

魔法が使えるというのは嘘ではないらしく、魔力が流れてくる感覚にも別段驚いた様子はない。

「はい、終了です。一時はどうなる事かとドキドキしましたが、無事に契約が成立してよかつ・・・」

その時、カケルの体から銀色の魔力が天井に向かって吹きだした。

「シエルの魔力の色は銀色でしたから、相性がちょうどよかったんでしょう。良かったですね、シエル」

「・・・はい」

私は少しだけホッとした。

ただでさえ人間の庶民というファミリアにしては対して強いものでもないのに、そのうえ相性まで悪かったら最悪だ。寮に帰った瞬間首をつつていたとしてもあまり驚かない。それぐらい大事な問題なのだ。

「で、俺はどうしたらいいんだ？」

今までずっと黙っていたレイがついに口をはさむ。

「ああ、あなたも一応シエルが召喚したことになってますから、一緒に寮に帰ってください」

「・・・生徒が人を強制的に召喚しておいて、謝罪の言葉ひとつないとはな」

ボソツとレイが呟いていたが、私にはちゃんと聞こえている。

「それは謝ります。普通の精霊たちとは違って、あなたたちにも自分たちの生活があったんですから。そして、あなたの家族や友人たちも、突然二人が消えて驚いていることでしょう。本当に申し訳ありませんでした」

先生の謝罪に、私はハッと息をのんだ。

確かに、庶民といえども人間として生活を送っていたんだから、突然召喚されたらそれはそれは迷惑だろう。

どこの町から、国から来たのかはわからないが、着ている服が見たこともないものな辺り、かなり遠くから飛ばされてきたに違いない。

でも、ファミリアとして召喚された限りは、普通の人間の生活に戻ることはできない。

ただ、レイに関しては契約を結んでいないのでわからないし、何しろ前例がない。

「俺はここに留まる必要もないみたいだが、カケルのことも心配だからな。残ってやるよ。ただし、おまえの従者をやる気はない」

「はいはい。これで授業を終わります。各自寮に戻ってください。今日は サモン・ファミリア の儀式の日だったため、他に授業はありません。これ以降は、各自のファミリアたちとゆっくり過ごすがいいでしょう。明日からはまた平常時と同じカリキュラムに戻ります」

メルフィン先生の授業の終わりを告げる声とともに、皆席から立ちあがり、ファミリアとともに各自の寮室に戻って行った。

もちろん、私はカケルとレイを伴って。

第二話『俺は何者にも従う気はない。だから、却下だ』（後書き）

はい、次からは三人称目線で入ります。

たまに登場人物目線になることもありますが、その時は前書きで事前に連絡します。

では次回の更新がいつになるか分かりませんが、よろしくお願いします
ます

第三話 チート仕様

「いい、あなたたちにまず説明する必要があるわね。とりあえず言葉が通じるのは、サモン・ファミリアの儀式の効果。ちなみに書くのも読むのも出来るわ。そしてこの国はザーネイル、大陸の最東端に位置している。・・・ここまではいいわね?」

寮の部屋に帰るなり、(女子寮に入るっていうことで、かなり気がとがめたが)シエルの説明が始まった。

すべて個室らしく、そこそこ豪華で贅沢な学校であることが分かる。

「いや、全くわからん。・・・日本って知ってるか?」

レイは思う。

もう丸わかりだが、ここはきっと、異世界なんだろう、と。

これで日本を知らなければ確実に異世界だと言える。

そして案の定、帰ってきた答えは

「ナニソレ?にほん?」

「俺たちがいたところの名前だ。たぶんことは違う世界なんだろうよ」

「何!?異世界って(だと)?」

見事に、カケルとシエルの声が被った。

っていうか、気付かなかったのか、カケルは。

着ているローブみたいな服、いまどきどこの国でも着てなかっただろうに。

「そう。そう考えれば、他の奴らの奇妙な格好もうなずける上に、使い魔なんてものが存在するのもわかる。ちなみに、カケル。この世界にも魔法はあるみたいだが、詠唱が必要らしいな。剣と魔法の世界で、科学技術は物凄く遅れている、っていうところか・・・面白いが迷惑だな」

「かがくぎじゅつ?」

「あー、シエルは知らなくていい、うん」

「へー、面白そうじゃん、元の世界で退屈な日々を送るより、十分楽しそうだし」

「おまえの適応能力には呆れるよ・・・」

レイは大きくため息をついて突っ込んだ。

確かに、未練なんてほとんどない・・・しいて言えば、兄妹にもう一度会っておきたかったっていうのと、それ以外の新宮家の奴らに復讐しておきたかった、そして・・・。

何気に結構あることに気付いたレイは、さらに機嫌を悪くした。

「悪かったわね・・・、まあ、ここの生活がつまらないってわけじゃないと思うわよっ！楽しんでちょうだいっ！」

セリフだけ聞けば、高慢な貴族のお嬢様のセリフだが、中身には本当に謝罪の気持ちがこもっていた。

少しでも、レイの機嫌を直そうとしているらしい。

そしてここでも、カケルの周りを明るくする能力が発動した。

「そっぴゃ、おまえ彼氏とかいんの？」

「・・・・・・・・やれやれ」

もう心底呆れきった、という表情になったレイは、床に身を投げ出す。

「い、今募集中よ！あんたたちはただの庶民・・・って、相違やどんな能力を使えるのかまだ知らないわね、今度は教えてくれない？」

「ええ？この世界は今、平和なのかどうなのかとか、食事の作法とか、聞いておきたいことがいろいろと・・・」

「そんなん説明してたら日が暮れるわよ！まあ、一つだけ。今、大國デルムーンっていうところが、攻めてきているわね。最西端にあるから、私たちの国に着くまでに、五つの国を倒さなきゃ無理だらうけど」

「まあ、そこそこつてとこか。しかしテレビもゲームもないつてのは参ったな・・・」

「おまえの頭の中は、それしかないのか・・・？もういい、修行に行ってくる。付き合うか？」

いい加減忍耐の限界が来たのか、立ち上がったレイが、どこかに向かおうとする。

「そうだな、この世界の魔法も見ておきたいし、シエル、案内と実演、たのんでい・・・」

カケルもさすがに言葉を切った。

なぜかというと、だんだんシエルの顔が悲しみと怒りに歪んできているからだ。

「まず、この学校のシステムの説明をする必要があったわね・・・。実は、一学年につきS～Eまで六つのクラスに分かれていて、Sが保有魔力の量も才能もあり、頭の良さも段違いなクラス。Eが一番ダメなんだけどね。貴族は普通B～Sのはずなのに、私のクラスは・・・」

「E、ってことか。さっきは俺たちを魔法で起こそうとしたみたいだが？」

レイの物言いは、不機嫌なためかいつもにもまして容赦がない。

それに一瞬ひるんだものの、開き直ったようなシエルは言葉を紡

いだ。

「そう。本当はあの魔法も、もっと強力なものはずだったんだけどね。ちなみに私は一年生。それも入ったばかりだから仕方がない、何とかなるって言われてるんだけど、実際は両親にも教わったりしてるから、もっと小さいころから習ってたし、貴族はたいていそうなんだけど・・・」

それを聞いた途端、レイの顔つきが変わった・・・ように見えた。事情を知るカケルとしては、内心驚くしかなかった。

同じような境遇にある二人が、こうして出会ったんだから。

「・・・そうか。続けてくれ」

「そして、毎週一回、模擬戦があつて、生徒同士の一騎打ちみたいなものをする。まあファミリアはありだけどね。そして一カ月に一回、S〜Eクラスの間でランダムに対戦相手を選びクラス単位で勝負する。さらに、相手も了承すれば個人的に決闘を申し込むこともできるの。そして学年末にはS〜Eの中で最も強かったクラスの生徒には、何かしらの褒美がもらえ、個人的に活躍した生徒にも賞があるらしいの」

「ふーん、そうか。で、俺は出られるのか？ファミリアもときだが」
レイは思う。

——こいつの境遇は俺と似ているのかもしれない。なら少しでも、

助けてやるのが道理っていうものか。この世界の情報も貰わなきゃならないし、修練にもなるし、参戦できればメリットだらけだな。

「さ、さあ？出られるんじゃない、どちらか一人、という設定かもしれないし、て言うかもう、ここの生徒として入っちゃえば？」

「話が飛躍しすぎだ、バカ。さて話は分かった。修練に行くぞ！」

「わわっ！いきなり決闘を申し込まれたりすることもあるから、気をつけ——」

何か言っているシエルと、考え込んでいるカケルを引つ張って外に出たレイに、いきなり声をかけるものがあつた。

「あら？あのシエルが引きずられているなんて珍しいわね」

「・・・どちら様？」

「うるさいわねえっ！あんた、けつと・・・」

決闘には気をつけて、とか言いつついきなり決闘申し込むのかよ、と思わず突っ込んだカケルであつた。

「まだ名乗ってなかったわね。私はエリシア＝リラン＝イリーナ。よろしく」

底抜けに明るい、そのエリシアの態度に面食らったレイだが、一

応差し出された手を握り返す。

何かを期待したようなカケルは放っておかれていた。

「大方、闘技場にファミリアの能力を見に行くの？私も付いていていい？」

「ああ、いいぞ。その代わりと言ってはなんだが、お前の魔法も見せてもらうことになるかもしれないが、いいか？」

「ええ、もちろん。ところで、何でシエルじゃなくてファミリアのあなたが交渉しているのかしら？」

レイとシエルを交互に見たエリシアが、不審そうな声を上げる。

「あ、俺はこいつのファミリアもどき。自分の意志と思惑でこいつという。そしてファミリアはこの天パだ」

「そうなの、ふーん」

興味を失くしたように、エリシアはカケルから眼をそらした。

そしてそれに撃沈するカケル。まあエリシアは赤髪長身の、まさにカケルの好みのタイプの女性だから、しょうがないとも言えるが。

「さあ、早くいかないと同じように考えている人たちであふれかえるわよ。行きましよ」

「・・・分かった」

ちなみに、既にレイは二人を解放していた。

「引きずって行くのも疲れるから、自分の足で歩いてくれ。俺とエリシアは テレポーテーション ！で行くから」

最後のセリフが聞こえていたかはわからなかった。なぜならコードを詠唱し終わった途端、レイの魔法が発動し、周囲の空間がゆがみ、エリシアの記憶にある通りの闘技場が出現していたからだ。

「い、今の魔法は？」

「瞬間移動の魔法だが、ここにはないのか？」

「あることはあるけど・・・最高レベルの魔術師が二三人は集まって使う魔法よ？単身で使うなんて・・・聞いたこともない」

ちなみに、この魔法は新宮家でも使えるものが少ない。

もちろん、兄や姉は魔導書なんて読まないから、知らなかっただけだ。

そしてエリシアを連れてきたのは、一人で行動しているとさすがに怪しいのと、彼女の記憶からこの場所を特定したことで、闘技場に来ることができたからだ。

術を使う本人か、一緒に行く者が、直接行ったことがあるところか、聞いていたか何かで詳細に記憶があるところでない瞬間移動はできない。

「ま、細かいことは気にするな、あと今から俺はお前のファミリアとしてふるまうことにするが、目立つことはしたくないだけだ、いいよな？」

まだ愕然としていたシエルは、反射的にうなずいていた。

「え、ええいいわよ。私のシルフはちょっと隠れてもらおうね」

言うなり、シエルの周りに吹いていた風がやんだ。

「俺としては、精霊なんて見るのは初めてなんだが・・・お互い、それは置いておこうか。説明するより、試しに行った方が早い。それにそろそろあいつらも来るころだろうしな」

レイが言い終わった時には、息の荒いシエルと、まだまだ余裕、といった表情のカケルがやってくる場所だった。

「お、遅かったな。さあ、中に入るぞ。今日だけは特別に、先生が見張っているから、闘技場内は乱闘可能になっているらしい。それが嫌なら入らないことをお勧めするが・・・」

「私も今初めて知ったことなんだけど、何であんたが知ってんの？」

「俺も知りたいな」

シエルとカケルの問いに、レイはだるそうな目つきで近くにはられたプリントを指す。

「書いてある。以上」

本当だ、と呟いている二人をしり目に、レイはゆっくりと闘技場内に入って行った。

第四話 「挫折を味わったことのないお前たちに、負ける気はない」(前書き)

早速厳しくなってきました連日投稿！

ストックなしでのスタートはきつい・・・

でも少しずつでも増えていくお気に入り登録を糧に頑張ります・・・
！

第四話 「挫折を味わったことのないお前たちに、負ける気はない」

「おい、見るよ。あの使えない 欠陥品 のファミリアの登場だぜ
！」

「ほんとだ・・・でも、ファミリアになったのは、もう一人の方だ
ったんじゃない？あほ面の」

「マジ？あいつらただの庶民だろ？魔法もろくに使えない、しかも
知識もないっていうつわさだぜ」

「あたしが聞いたところじゃ、この国の名前すら知らなかったらし
いよー。精霊ならともかく、人間で知らないとか、常識ないにもほ
どがあるよね」

闘技場に入るなり、野次が大量に飛んできた。

レイとカケルは、怒るを通り越してあきれていたが、シエルの方
はそうではなかったらしい。

「・・・・・・・・・・！く、くそっ！」

「黙れよ、泣くしか能のない、『生まれ損ない』が！てめえに生き
ている資格なんてないんだよ！」

いかにもお坊ちゃんです的な顔をした貴族らしき男子が、そう吐
き捨てた。

その時。

ドオオオオオン！

轟音とともに、闘技場の壁が一部崩れた。

強力な結界が張ってあったにもかかわらず、だ。

そしてそれを成したカケル本人は、手を無造作に前にのばして憤怒の形相で野次馬たちを睨みつけていた。

「お前、本気で言っているのか？力が全てだと。強くなければ生きている価値がないって、本当に思ってるのか？」

カケルが見せた力の一端に、周りの無関係だった野次馬たちは、無詠唱で発動したとか、庶民のくせにあそこまでの魔法を使えるなんて、とか、やっぱりな。とかいろいろと言っていた。

ちなみに最後の、やっぱり、といったのは後ろにいるエリシアと、頭のよさそうなメガネの、青色の珍しい紙に紫の眼をもった、秀才っぽい男だった。

雑魚とは違い、カケルの持つ魔力を感じ取れたのだろう。

レイはすでに知っていることだが、この世界では魔力の量がごくごく微量だ。

レイでさえ、既に学校一位の魔力量だということを、シエルから聞いた話と自分の測定値から推測して知っていた。

慌ててレイは自分から漏れている力をカットする。

それをしてしまってから大きく後悔した。

これでは、あいつの力に気付けたことになり、それは自分もそれ以上の力を持っているから・・・ということになる。また情報を与えてしまった。

「き、貴族の僕にそのような口のきき方を「黙れ、カスが」」

カケルが睨みつけると、それだけでお坊ちゃんが怯んでしまった。

「いいか、俺はお前みたいな価値観を持っている男が一番許せない力が全てか・・・面白い、なら何か？お前はここで俺に倒されても文句は言わない、そして貴族が一番強いと思ってるから、庶民の俺に負けたら貴族を退くと、そういう風にとっていいんだな？違うとは言わせねえが」

カケルはさつきから、濃密な殺気をしゃべりながら放出し続けている。

おお怖、とレイが大げさに震えているが、明らかに演技だとばれられた。

「ふ。ふふん、いいだろう。むしろ、お前たち五人でかかってこい。僕も五人で勝負してやるよ」

「いや、一人でやれ。それにファミリア入れれば、二人と、ファミリアなしの一人だ。それとも、仲間がいなきゃ何もできないのか

？その癖にあんな大言壮語をしていたと。温室育ちのお坊ちゃまが、いい加減にしろ、ぶっ飛ばすぞこら！」

マジでキレてんな・・・と思ったレイ。

本当は自分が行ってもよかったのだが、力をあまり見せたくないし、それにあいつが代わりにキレてくれたから、俺が怒れないじゃないか、と内心で考えていた。

もちろん、カケルの殺気には全く恐怖を感じない。

しかも、まだまだだな、と酷評している始末だ。

しかしエリシアとシエルはそうでもないようで、シエルは、ファミリアと野次馬の手前、気丈に振る舞ってはいるが、震えているのが、視力のよいレイには丸わかりだし、エリシアに至ってはもう座り込んでぶるぶると震えている。

しょうがないので、レイは手を軽く振ってシールドを張ってやった。

その瞬間、二人の震えも止まったが、逆にきよろきよろと首を振り出した。

やれやれ、そこまでは面倒を見てやれないとぼやいたレイの声はだれにも聞こえることがなかった。

「く、くそつ。ああやってやるよ。誰が温室育ちだ。貴族に喧嘩売

ったことを後悔させてやるよ！」

「ああ、上等だ。どうでもいいがお前の名前を聞いていなかったな。聞いても数秒後には記憶から消えてるだろうが、一応聞いておいてやろう。俺の名前も教えるぞ・・・冥土の土産にでも持つてけ」

思いつきり、自身に出せる最大限の殺気を、視線に乗せてお坊ちゃんに向ける。

しかしお坊ちゃんの方は真剣に驚いているようで、全く気付いていなかった。

「僕の名前を知らないだと？ハハッ、とんだ田舎者だな。ギリオルⅡアルセウスⅡセルデシア、この国の三大貴族のまつえ」

「ああ、名前だけでいいぞギリオル。前言撤回だ、貴様のことはこれから数年間、一度も忘れてやらん。見つけるたびに決闘でぼこにしてやるよ・・・そうだな、貴様が死ななければ、だが」

これはやばい！

カケルが相手を貴様呼ばわりするときは、相当にキレている時だけだ。

止めないと・・・周りに被害が！

レイはそう思うが、反対にギリなんちゃらに味方するのは絶対に

受け付けられないし、まあ他に被害が出ないように、シールドはつとけばいいか・・・ぐらいに格下げした。

もちろん、ギリなんちゃらが死のうがどうしようが興味もない。

「行くぞ・・・あ、レイ。周りに被害が出るかもしれないから、頼んだぞ」

「任せとけて。既に準備は終わってる。存分にやっていいぞ」

この時、してやったりとばかりにギリオール顔に笑みが浮かんだ。

「ほら、あいつに手助けしてもらうつもりか？何を頼んだのか知らないが、やっぱり庶民はバカだな、おい」

「ああ、ちょっと黙れカスが。なんならお前の呼びかけにこたえてくれる奴、全員集めたってかまわねえぞ。もつとも三十秒以内に終わらせる。俺はそんなに気が長くない」

「分かったぜ、おい。ケヴィンにアスターク、ラガン！ファミリアもつれてこい！」

本当に呼ぶとはな、とレイを含めたほかの観客たちも呆れていると、三人の魔法使いと、サラマンダーが一匹、サンダーバードらし

き奴が一匹、小型の竜種も一匹連れて指を鳴らしながらやってきた。

もちろん、全員貴族の証である銀髪で、銀色の眼をしており、正味一時間もしたら、どれが誰だかわからなくなりそうだ。

その点、貴族にも珍しい金髪のシエルは、それも喧嘩を売られる原因となっているんだろうとは、容易に想像がついた。

「用意はいいか？行くぞ・・・ 我、カケルの名において具現せよ、
『罪人殺しの炎槍』」

中級魔法の詠唱破棄。

カケルが省略した呪文を唱え終わると、まだ詠唱を唱えている途中だった三人の魔法使いめがけて、灼熱の炎で構成された、極太の赤色の槍が飛んでいく。

誰かが防壁の魔法を横から張ったのだろうか、詠唱中の彼らの前に、半透明のシールドが現れる。

見覚えのあるそれは、まぎれもないレイのものだった。

驚いて、そして怒って振り向いた先のレイの顔は、まるで悪だくみを思いついた小学生みたいに、にやりと笑っていた。

それを見て合点がいったカケルは、次々と詠唱破棄の魔法を唱え

ていく。

「我、カケルの名において具現せよ、キル・ソング オーケストラ『殺人歌の大合奏』 我、
カケルの名において具現せよ、フルバースト『魔弾の射手：全弾発射』」

さすがにやりすぎだ・・・とは思ったが、レイに止める気はない。

殺人歌の大合奏は、発動したものを起点に、相手の生命力と精神力を奪い、じわじわと死に追いやる魔法。その旋律を耳にしたものを、動けなくする効果も持つ。

逃げられないまま、だんだんと苦しませて死なせるその魔法は、近くにいれば仲間にも有効なため、レイは自身にもシールドを張る。

そして魔弾の射手。

読んで字の通り、伸ばした手から連続的に魔力の塊でできた弾丸を発射する。

さながら、高度な命中精度と破壊力、貫通力を持ったサブマシンガンのようなものだ。

その中でも、序幕、弾幕、全弾発射に分かれており、打ち出される数がそれぞれ違う。

.....

今カケルの使った全弾発射は、一秒間に二百発の弾丸を発射する。

この世界の普通の人間ならすぐに魔力切れだが、カケルはかなりの魔力量を持っているため、この程度ならなんてことはない。

風を切る音とともに、魔力の弾丸が雨あられと、殺人歌によって蝕まれた、ギリオールたちのもとに殺到する。

そして今だに、炎槍を食い止めていたシールドを、レイは片手を振って解除した。

弾幕とともに、炎の槍までもがギリオールたちの心臓を貫かんと迫っていく。

おびえて詠唱をやめてしまった取り巻きたちと違い、多少はプライドがあるのか、続けていたギリオールの詠唱が完成した。

「油断したなあ！ アイシクル・ワンハンドレッドミラー」

一応、中級魔法に属する水系魔法。

辺りに百の氷でできた鏡を出現させ、その一つ一つから氷の槍を打ち出す魔法。

が、鏡が出現した途端、二百の弾丸によって撃ち抜かれて、あっさりと砕けた。

「だ、誰か助け」

自分の魔法があつさりと碎かれたことにいまさらながら怯えを感じたのか、辺りを見回すギリオール。

そして、そのまま後ろを向いた状態で、彼のファミリア、シヴァと共に、カケルの魔法に意識を刈りとられ、ばたりと前に倒れた。

カケルは、その頭を、グシャツと踏みつけてぐいぐいとねじって、気絶から意識を引き戻す。

「いたっ！」

そして、彼の胸倉をつかみ上げると、大声で怒鳴った。

「貴様、二度とシエルのことをバカにするんじゃないぞ、後さつさと貴様は貴族をやめろ。貴重っていう単語の『き』の字がかわいそうだ。後、他の誰にも上から見下した態度はとるな、次は容赦なしで、即座に殺すからな・・・覚えとけ」

カケルは、左手に魔力を集め、光でできた刃となした。

それをギリオールの喉に持っていく。

「貴族をやめるのは簡単だ。まずはそのチャラチャラした銀髪の色を変えてだな」

いふなり、魔法でギリオールの髪の色を真っ白に変える。

「親とも縁を切って、自分の力で生きてけよ。貴様にはなんの力もないってことを、よく覚えとくんだ」

言うだけ言うと、彼の後頭部に思い切り手刀を食らわせて気絶させる。

カケルは、もう一回倒れ伏したギリオール顔をわざわざ一回蹴飛ばしてから、悠々とレイたちの方に戻って行った。

レイは、入れ替わりにギリオールの方に向かっていき、今度はみぞおちに一発拳をめり込ませて起こす。

「おい、あいつが切れてくれたから今回は見逃してやるが、次やろうとしたら俺も許さない。そして今まで、この学校が始まってからの一ヶ月間ほど、同じようにシエルやその他の平民たちに接していたのだとしたら、て言うか十中八九そうだろうが、この一年間は、お前に平穏な日がないと思え。毎日決闘を申し込まれると覚悟しておいた方が身のためだ。俺と、カケルの二人分な」

言うだけ言うと、先ほどとまったく同じ位置をもう一度殴り、気絶させて転がしておいた。

先ほど（名前忘れた）彼に味方していた、今は腰を抜かし中の三人の方にである。

「お前らもだ。こいつに無理やり付き合わされてたならともかく、

自分の意思での行動なら、同じ目にあってもらうがどうだ？自分の意思でやったクチか？」

レイとカケルが睨みつけると、三人そろって仲良く首を横に振った、それこそ勢いをつけすぎて首が飛んでいくんじゃないかというほどに。

それを見たレイはさらに不機嫌そうに、眉間にしわを寄せて、駄目押しをした。

「フンッ。所詮は負けそうになったら裏切る、その程度のことまらん屑か。殴る価値もないな」

そう言い終えると、今度こそカケルとレイは二人で、待ちぼうけを食らわせていた二人の方に歩いて行った。

第四話 「挫折を味わったことのないお前たちに、負ける気はない」 (後書き)

はい、ちょっと暴力的描写がありましたが、とくに流血沙汰にはなっていないので許してください。

今回、あそこまでカケルが切れた理由はお分かりでしょう。

彼は、レイの苦しい過去を知っていたから、そして当時の彼が同じように言われていたことも知っていたから、あそこまで怒ったわけです。

レイが本当に苦しんでいたと知った時の、新宮家に対する怒りも込められていたみたいです。そう考えると少しご愁傷様なギリオール達ですね。

レイの力は、またもうすぐ発揮されることになると思います。

では、また明日！(^^)ノシ・・・こうでも書いておかないと、明日投稿できないかもしれない・・・orz。

第五話 最強の二人

「「ねえ、カケルって意外に強かったんだね」」

レイとカケルが、二人のもとに戻ったとき、一番初めに言われたセリフがこれだった。

「なに、二人とも俺を役立たずだと思ってたの!？」

カケルの文句にうんうんと頷く、エリシアとシエル。

「何気にひどい!」

「だって、真っ黒けの平民だし、普通は魔法は使えないはずだし。精霊たちと比べれば、どっちが強そうに見えるっていうのよ?」

「……確かにそうですよーだ。まあ、クラス対抗戦なら、協力してやるうじゃないか。そうそう簡単には負けないだろうよ。レイが敵に回らなければ……」

「それはないな。今日で、性格の悪い貴族が多いと気付いた。お前たち二人が例外だ。で、そんな性格悪い奴ばかりのところに行く気にならん。そもそも、参加できるかわからんが、できるならEクラスに参戦するさ」

レイは、いかにも心外っ!といった風な顔で、すかさず口をはさむ。

「無能」「生まれ損ない」「役立たず」……いろいろと、彼に

とつての禁句が、本人に向けてじゃないけど連発されてたからなあ。

もつとも、俺が切れた理由にそれも含まれているんだが。と、力ケルは思った。

「で、レイはどんな力持ってるの？さっきの力ケルを見たら、物凄い人外に近かったけど」

レイは、力を見せるとは言ったものの、全ての力を披露する気はない。

だから、適当な奴を捕まえて決闘挑んで、そいつを倒してみよう
とか思ってたんだが・・・。

「いやしかし、見事に避けられてるな、俺たち。どこに向けて力使えばいいのかわからん」

レイが呟くと同時に、シエルがダッシュして、近くにいた、銀髪じゃない、庶民の生徒に決闘を申し渡した。

「い、いやいや遠慮するよ。さっきのファミリアなっていうならいいけど」

申し立てを受けた瞬間、ぶんぶんと首を振る。

「ああ、私とアのファミリアは参戦しないわよ、そのもう一人の黒髪。十人程度ならまとめて相手してやるって言ってるけど」

「やっぱり強そうじゃん・・・ま、いいか。僕の知り合いが、さつきから「うおおおお！あいつ強かったな！おいレスト、決闘挑みに行こうぜっ！」・・・ってこんな感じだから、抑えるのが大変だったんだよ。彼そこそこ強いから、無理に止めるのも難しいし、他の人指名したら、たぶんその人がかわいそうだし、扱いに困ってるどころだった」

「よしっ！」

シエルは、小さくガッツポーズをとった。

「他には？適当に連れてきていいよ」

「おい、アークライ、あのもう一人の黒髪なら相手してくれるってさ。他にも数人ならまとめて相手するって言ってるけど、僕と君だけでいい？」

カケルに決闘を申し渡したが、召喚師であるシエルじゃないと決闘の申請ができないため、わざわざ大股で歩いてきているゴツイ少年は、どうやらアークライっていうらしい。

「はっ！俺一人でも十分だと思うが、レストはいい。しかあし！他の奴らは入れなくていいっ！」

唾を飛ばしまくりながら怒鳴る内容は、その場において話を聞いていた全員が予測できたものだった。

「レイー、お二人さんみたいだよ。相手してあげてー」

「よしわかった。中央まで来てくれ」

アークライとレスト、そしてレイが歩み寄り、お互いに一礼。

このあたりのマナーは心得ているらしい三人。

アークライたちはともかく、レイがどこでそんなマナーを学んだのかわからないが、もともとは何か荒事関係をやっていたのだろうか。

「では・・・行くぞ!」

「おう、正々堂々、正面から勝負させてもらっぜ!」

「君の強さ、見せてもらうよ!」

一番初めに動いたのは、レイだった。

腰に差していた刀を抜いた。

しかし、構えただけで斬ろうとはしない。

その刀は青い魔力を帯びており、耳障りでないのが不思議だが、キィィィン、という音を立てている。

アークライとレストがそれぞれ杖を構え、刀の前には長い詠唱をしている暇がないと判断したのか、二人同時に同じ魔法を詠唱破棄で発動する。

「ヒーリング・シールド
癒しの盾」

一応、下級魔法に分類されるそれは、光り輝く盾を出現させ、普通の剣などの攻撃を弾き、持っている者の怪我を治し続けるという魔法。

それでも、詠唱破棄で出現させると相当な技量が必要で、おそらくは一年生ではないだろう。

先ほどのなんだったか・・・ギリなんちゃらとは格が違う。

「魔法で戦おうか？それとも刀がいいか？好きな方を選んでくれ。魔法使いに刀で挑むのはいささか反則な気がしてな」

親切にも、レイが確認をとる。

「いや、全力で来てくれてかまわない。その刃が曲がった、珍しい剣を使うというのなら止めはしないさ」

常に笑顔を崩さないレストが、真面目な顔になって言った。

しばしレイは目を瞬いた後、軽く笑って言った。

「そうか、これは手加減できないから傷をつけてしまうかもしれない、それでもいいそうだから・・・行くぞ」

言下に、レイの姿が消える。

「消えたっ！」

先ほどから、会話に参加していなく、ずっと詠唱を唱えていたアークライが、素早く反応する。

早口で残りの詠唱を終えると、長い詠唱が必要な分、強力な威力を発揮する上級魔法を発動した。

「ライトニングソードレイン
雷剣雨」

辺り上空に雷でできた剣が出現し、全てが落下し、千万ボルトを超える電圧をもって地面に穴をうがち続ける。

透明になっているときは、次の魔法を使うことができない。

そして、攻撃を受けても透明化は解除される。

よって、これを回避するには運動神経の身で乗り切るか、やむなく透明化を解除して魔法で防ぐかどうかということになる。

しかし、魔法が当たって透明化が解けたレイを狙おうと、構えていたアークライの隣で、ゴスツという嫌な音がして、レストが崩れ落ちる。

「何っ！この魔法をかくぐるなんて・・・」

全範囲を平等に攻撃するはずの魔法を、よけることは不可能。

よって、アークライはこの魔法を選んだのだが・・・

「甘い！この攻撃の死角は、術を使った本人の周辺だ。それにこの程度の魔法で俺に傷はつけられない！」

そして、アークライには大きな誤算がある。

・・・・・・・・・・・・・・・・

まず一つ目は、レイが透明化の魔法を使っていなかったということ。

純粹に、前傾姿勢になって疾走したために、目の焦点補正が追い付かなかったために、はたから見えていれば消えたように見えただけだ。

そして二つ目。小さいころから、彼を嫌う新宮家の連中や学校の同級生によって、魔法で大量の石を落とされたり、自分で同じように大量の魔力の塊を落したりして、反射神経を鍛えていたレイにとって、この程度の攻撃なら回避できる、ということ。

「しかし惜しかったな。この攻撃、当たってたらかなりの威力をもっていたと思う。着弾に若干のタイムラグがあるから、それをコントロールして、全て同時に着弾するようにすれば、もっとレベルアップを期待できるぞ」

じゃあな、というレイの声とともに、腹部に強い痛みが走り、アークライの意識は闇に刈りとられていった。

第五話 最強の二人（後書き）

結局、レイが魔法を使うことはありませんでしたねえ……。でもまあ、またしばらくしたら事件が起きると思いますので、そのときに。

第六話 袖の下（前書き）

サブタイトルが思い浮かばない・・・！

第六話 袖の下

闘技場での乱闘から二日が経過した。

シエルの好意によって、次の日の朝飯が物凄く豪華なものだったりと、シエルの授業中は暇なので、厨房の手伝いに行ったら、包丁を使って野菜や肉を切るのがこの世界ではそこそ難しい技とされているらしく、剣技も得意なレイは、厨房の料理長に気に入られ、困った時の即戦力と認定される代わりに、毎日豪華飯にありつけることになった。

さすが、貴族満載学校である。このときだけは、自分の身の回りの嫌いではない貴族（エリシア、シエルその他二名ほど）に感謝してしまっただけだ。

明日、早速クラス対抗戦があり、Eクラスのシエルたちは、今回Cクラスと戦うらしい。

そのほかに複雑な思惑が重なって、今レイがいるところは・・・

「傭兵ギルド、か。実際に見ることになるとはな・・・」

傭兵ギルドになんかいる理由は一つしかない。

当然、金を稼ぐためだ。

「いらっしやいませ、依頼の登録でしょうか？」

レイをまだ子どもだと判断したためか、迷子探しか何かの依頼をしに来た坊ちゃんだと勝手に誤解していた。

「いや、ここのギルドに登録をしたい」

えっ・・・と不思議そうな眼で見返されるが、腰に付けた刀を見て、一応納得はしてくれたみたいだ。

心得はあるみたいだけど、すぐに泣きを見る羽目になるだろう・・・と考えたようだ。

「分かりました。ここにお名前と年齢、得意武器の記入をお願いします」

差し出されたギルドカードに、さらさらと文字を書いていく。

もちろん、漢字とこの世界の文字で、だが。

「このカクカクした字は・・・いえ、この下の・・・レイニイミヤさんですか。十六歳ですね。得意武器は剣と魔法。かなりお若いようですが大丈夫ですか？」

「もちろん。登録料とかはいるのか？」

「いえ、こちらにサインしてください。それで登録完了です。依頼の報酬金は全額お渡しします。ギルドへの手数料は初めに貰っているんで、問題ないです。ランクはEからSまであって、自分の一つ上の階級の依頼までなら受けられます。登録したばかりの貴方は最下級ランクのEから始めてもらいます。以上、何か質問は？」

「誰かと一緒に行くときとかはどうなるんだ？」

「その中で、一番ランクが上の人に合わせます。が、パーティの誰かが死んだり重傷を負ったりした場合は、ギルドではなくそのランク上位の方と、リーダーの方に責任を取ってもらうことになっていきます」

なるほど、それではいきなり誰かに組んでもらうわけにもいかなさそうだが……。

「分かった」

先ほどと同じく、流れるような達筆で自らの名前を綴るレイ。

「はい、登録完了です。依頼はそちらのクエストボードから受けられます。紙をはがして持ってきてくださればいいので。では、御武運を」

レイはもう受付嬢の方を振りかえることもなく、晴れて自分のものとなったギルドカードをもち、クエストボードに向かった。

その二十歩にも満たないような距離の間で、ゴツイ巨体の男たちに絡まれる羽目になった。

「おい、ガキ。ここはガキの遊び場じゃねえ。さっさと帰んな」

「さて、何か手頃な依頼はないか……?」

「聞いてんのか、ここはお前みたいな年端もいかねえ子どもがいるところじゃねえんだ。さっさとママのもとにでも帰りなっつていっつてんだよ」

「・・・近場の討伐系クエストは無いか。今から出発の護衛系クエストでもいいが」

幸い、護衛のクエストで現在は朝の九時前。九時半出発の、行商人を盗賊から護衛する任務があつた。

報酬は、金貨百枚。十万円相当だ。

道のりは、三日間だと書いてあるが、問題にならない。かなりの好条件と言えよう。

そしてその受け付け締め切りが後一分後に迫っていると気付いたレイは、大慌てで先ほどの受付嬢のところに舞い戻る。

もちろん、絡んできている男たちなど存在しないかのように無視している。

その扱いに不満を感じたのか、そのむさくるしい男たちが、剣を抜いた。

酒で頭がとろけていたんだろう。半ば酒場も兼ねたようなギルドだからな。

「おい、舐めた真似してんじゃねえぞ・・・」

「はい、この依頼を受けたいんですが」

「締め切りぎりぎりですね・・・はい、受け付けました。行つてらっしゃいませ！」

手数料すら取られなかったので、そのままレイがギルドを出ようとすると、強引に肩を掴まれた。

「舐めた真似すんなっていつてんだよ！」

男たちが剣を構えた、その刹那。

ヒュツ。キイイイン！

風切音と金属音がして、男たちの手首から先が宙に舞った。

その抜剣から、鞘にパチンと音を立てながら戻すまでの一連の動作は、その場にいただれの目にも捉える事が出来なかった。

それなりに経験を積んだプロの傭兵たちですら、注いでいた酒がグラスからこぼれているにも築かず、あんぐりと大口を開けていた。

「さて、急がないと顔合わせに間に合わなくなるな」

そして彼らの手首を切り飛ばした本人であるレイも、返り血一つついていない綺麗な制服姿のまま、待ち合わせ場所へと向かった。

そこは、数百メートル先にある酒場のようなところで、ターバンこそ巻いてないものの、ラクダに乗ってシルクロードを横断してそんな格好の者が十四、五人と、護衛の傭兵らしき格好の戦士が六人いた。

「レイニイミヤだ。よろしく」

「行商隊の隊長、エリックだ、よろしく頼む」

レイは差し出された手を握って挨拶を交わした。

「ところで、目的地のリディアの街には行ったことがあるのか？」

何の事だかわからない、といったような顔を一瞬だけ浮かべたエリックだが、すぐに答えてくれた。

「ああ、何度もあるが・・・」

「なら、皆俺につかまってくれ、簡単に行く方法がある」

ざわざわと辺りにざわめきが広がっていったが、エリックの一声で、素直に従った。

さすがにこれだけの人数をまとめて運ぶのは無理だな・・・。

「よし、あんたたちが危害に合わなければ護衛の人間にきちんと報酬は払うんだよな？」

「もちろん、約束は守るよ。それに報酬はもう預けてあるしね」

どうやらそういう仕組みらしい。

なら、他の戦士たちには帰ってもらってもかまわないだろう。

「済まない、ここからは護衛なんて一人で十分だ、報酬はもらえるみたいだから帰ってくれないか？個人的にリディアに行きたいというものがあれば申し出てくれればいい」

不満そうな顔をした者もいたし、こんなガキが何を言うんだ、と怪しむ者もいたが、一人を除いて帰って行った。

それを見てあわてたのは行商隊の人たちで、「お前、勝手なこと

をしてくれやがって！」的な目線でレイを睨みつけている。

そんなものはきっぱりと無視して、リディアに行きたいといった女戦士と、十四名の行商隊を視界に収め、コードを唱える

「行つてらっしゃい。　テレポーション！」

そうして、レイと女戦士、行商隊の姿が一気にぼやけて消えた。

後には、空になった酒場があるばかり。

そして着いた先はもちろんのこと、リディアだった。

街を見て回りたい衝動に駆られたレイだったが、それを自制して、茫然自失のエリックその他十四名に告げる。

「じゃあ、任務完了だな。戻るぞ」

クエストの依頼書にサインをしてもらうと、何か突っ込まれる前に、さっさとレイはギルド前に戻った。

報酬はもらえたが、依頼書を渡した後の受付嬢は、終始不審そうな顔をしていた。

そうやって手に入れた金貨百枚を何に使うのか・・・それは、こ

それから数十分後のお話。

第七話 追憶の剣

レイは今、職員室前に来ていた。

元の世界の学校と違い、赤と金の布や糸で綺麗に装飾された部屋で、なかなかに見ごたえがあった。

時刻はちょうど正午ぐらいか。

あの後、高ランクの方とパーティを組んで、A級討伐クエストを二件こなし、一人で護衛任務を一つクリアした後、大金の入った袋をもって、学校に帰ったのだ。

本当はすぐに帰るつもりだったのだが、異世界に来たということ、店で何か買って帰ろうと思いつき、その分の金も含めて、金貨二〇〇〇枚は稼いでおいた。

そしてその金で、黒い服を三着（普段着、晴れ着、部屋着）と、土産物としてシエルに翡翠のイヤリングを買って帰った。

それでも、金貨は三百枚ぐらいしか減らなかったのだが。

そして厨房で昼飯を食べた後、職員室まで行って、今に至る。

「すみません、1―Eの担任の先生か、教頭、校長先生のどなたかはいらっしやいませんか？」

一応、礼儀正しく入って呼び掛けると、ちょうど授業がなかったらしい担任のガストロイという、男のゴツイ先生が出てきた。

魔法体育を教えているらしいが、そんなことはどうでもいい。

「君のことは聞いているよ。ファミリアの儀式で呼ばれたのに、ファミリアにならなかった、シエルの仮ファミリアなんだってね」

「その通りです。で、いつまでもふらふらしているのもあれなので、一応ファミリアとしての仕事も必要があればしますが、生徒としてここに入れてはもらえないかな、と思ひまして」

そう、レイも魔法が使えないわけではないし、強くなるならこの魔法も勉強しておいて損はない。

それにいい加減女子寮に寝泊まりするのも嫌になってきたためと、することがなく暇なため、こういう行動に出たのだ。

ガストロイは話の分かる人物らしく、校長先生に相談に行くといつて席を立った。

それから数分後、戻ってきたガストロイの話によると、「ファミリアの儀式はできない」「授業料は払ってもらう」「学年は一年から」という条件で入れてもらえるそうだ。

男子寮にも何部屋か空きがあるらしく、そこに泊まることも可能だ。

授業料さえ払えば、飯も今まで通り豪華なものが食べられる、もはや最高の条件。

「しかし、君はここに召喚されたわけだろう？外国の通貨は使えないし、シエルの家にも払ってもらえるのか？」

「いえ、ここに金貨が一万五千枚ありますが、足りませんか？」

そう告げると、レイはさっきから背負っていた大きな袋の中身を

ぶちまける。

ザラザラと大きな音がして、机の上にはたちまち金貨の小高い山ができた。

ガストロイの口が大きく空いて、先ほどの行商人たちと同じような表情になっていた。

ガストロイが彫像化している間に、校長もやってきて、大きく咳払いをすると、レイの方に向き直って言った。

「えー、これはどうやって手に入れたんでしょうか？」

言われて、ギルドカードをスツと差し出すレイ。

その裏面には、「護衛クエスト達成、金貨百枚」「火龍討伐クエスト達成金貨五千枚」「暴青猪討伐クエスト達成、金貨五千枚」「護衛クエスト達成、金貨二百枚」と書いてあった。

そして、火龍と暴青猪の皮や鱗、牙などを売って、金貨一万枚を手に入れ、今手元に残っているのは、特大の火龍の牙と鱗。

それも見せると、さすがに校長先生もフリーズした。

二人が元に戻るのには、たっぷり五分はかかった。

校長先生が冷や汗をぬぐいながらつぶやいた。

「いいでしょう・・・この金貨一万五千枚はいただいておきます。これで四年間、学費やその他もろもろの料金は一切要りません。よって晴れて今日から貴方はここ、サンクアル魔法学院の生徒となり

ましたが、新学期は始まったばかりです。魔力測定や実技のテストでクラス分けがあるんですが……」

それはもう、入るクラスは決まっている。

「それはもう無しで、Eクラスでいいです。シエルと同じクラスの方がいろいろと都合もいいでしょうし」

「そ、そうですか。では一応説明しておきます。日曜日は一日中自由で、街に行ってもいい日です。他は……生徒に聞いてください。以上、よろしいでしょうか？」

「ああ、問題ないです」

敬語なのかタメ口なのか分からない、相変わらずな口調でレイは言った。

その後、制服などをもらい、割り当てられた部屋に荷物（火龍の牙と鱗）を置き、制服をコートにかけて置いておくと、改めて自分の部屋を眺めた。

内装は、結構シンプルで、辺りは赤色の壁紙（布だが）、床には朱色の絨毯、ベッドのシーツは緋色だった。

テーブルとイス、ランプ、クローゼットがあるが、他には何もない。

時計すらなかった。当然と言えば当然だが。

「後は、自分で揃えろってことだな。これからシエルたちの授業が終わるまで……稼いでくるか」

その後、日が沈むまでレイの暴走は続き、ギルド側にももちろん不満が出ないよう、千枚ほどレイが手数料として渡しておいたし、レイの背負う頭陀袋の中には、ずっしりと金貨がたまっていた。

その値段は、およそ金貨十万枚。

本来ならもつと稼げたはずだが、良い依頼がなくなったのと、他の傭兵に依頼をとられたのとで、十万枚しか稼げなかった。

真つ赤な部屋の内装が嫌いなレイは、自分の好み合うよう、ベッドやクローゼットを買いなおした。

絨毯は、当然黒色だ。部屋に黒い絨毯というのもどうかと思うが、その品質は部屋に合った物にも劣らない。

そして買った物は適当に、テレポーションで部屋にはすでに配置しておいた。

もともとあったものは売って、金貨をさらに二万枚ほど手に入れた。

消費されたのも同じぐらいだったが。

そのまま、まだ時間があるためぶらぶらと歩いていたレイは、ふと自分の腰に目をやった。

そこにはまだ刀がくくりつけられているが、刀自体、この世界では珍しい武器だ。

「剣も買っておいた方がいいか。いいのはあるかな・・・？」

近くにあった武具商に入ると、景気のいいおやじの声が響いた。

「魔剣、とかあるか？」

少年の客が来ることでさえ珍しいのに、魔剣なんて注文されたおやじは、相当びっくりしたようだが、大量の金貨を見て、すぐに態度を変えた。

「えー、これとあとひと振りしかないんですが、どうでしょうか？」

そう言っておやじがさしだしてきたのは、黄色く輝く魔剣。

刃渡りは一メートルほどの、やや短いものだった。

「いや、遠慮するよ、もうひと振りの方を見せてくれないか？」

「もうひとつですか・・・いいですよ、ついてきてください」

背の低い少年には、先ほどの片手剣が精いっぱいだったのか、なんなのかはわからないが、今度の魔剣は相当なものらしく、レイは奥の蔵に案内された。

「これです。鞘から抜いてみてください」

渡されたのは、三メートルはあろうかという長剣。

普通の人なら、大人の男でも持ち上げることすら不可能と思われるレベルの重さだが、それを軽々と担ぎあげ、鞘から抜く。

キィィィィィィィン

特有の音がして、蒼く強く輝く剣腹が姿を現した。

それを見たおやじは、信じられない・・・とか呟いていた。

どうやら、普通の客が鞘から抜いても、ただの長剣になるらしい。

なにか仕掛けがあるのかと、軽く振ってみるが、問題もない。差し出された鉄の塊も、一刀両断できたため、強度もそこそあるようだ。

魔剣なのだから当然だが。

「気に入った。この魔剣、銘はなんていう？ 後、特殊能力は？」

レイは、闘技場から帰った後、エリシアとシエルにいろいろ話を聞いたため、魔法と戦闘に関する知識は、だいぶ豊富になっていた。

「銘は、特につけられていない。というより分からないんだ。だからこう呼ばれているよ。 追憶の剣 ってな」

なぜそういう呼び名がついたのか、も教えてもらった。

が、それはまた別の話だ。

「なるほど、そういうことか。で、どんなことができるんだ？」

見た目だけが綺麗で、強度をもつだけならあまり意味がないのだが。

「いくつかあるぞ。 まあこれまた扱えた奴がないから、伝承なんだけだな。

一つ目に、持ち主から魔力を吸い取って、それを剣自体にため、魔剣を強化することができる。偶然か必然か、兄ちゃんの魔力の色は青だ。この剣と同じで、相性も抜群だな。

二つ目が、瞬間転移能力。何時、どこにあっても、心の中で念じれば、兄ちゃんの手元に戻ってくるらしい。

そして形状変化。槍、剣、弓のどの形にも変えられることができる。基本は剣だが。そして剣なら長さ、槍なら重さなど、そういった部分も変更可能だ。

最後に、遠隔攻撃。目に見えない衝撃波を生み出して、遠くの敵を攻撃することも可能、なんだとよ。実際にやってみる・・・と言えないのが残念だな。俺だってこの家を壊されたくはないし」

「かなりすごいものみたいだな・・・何でこんなものをお前が持っている？」

要するに、偽だったらどうするんだ、という質問だ。

「ああ、俺の爺さんがこれの最後の持ち主でな。それ以来、ずっと倉庫にしまってあったんだが、使うこともないし、売ってしまうことに決めたわけだが、爺さん以外に使える者がいなかったから、今まで埃かぶってたんだよ。値段は金貨三万枚で手打ちだ。・・・と言いたいところだが、兄ちゃん以外、売れそうな相手もないしな、二万枚でもいい」

「買った！」

すぐさま頭陀袋から金貨を取り出し、二万枚まで数えようとするが、途中でめんどくさくなって、そのまま適当に、でも二万は超えるように取り出して渡した。

「釣りはいらぬ。そのまま貰っておいてくれ」

言うなり、追憶の剣を肩に引っさげたまま、テレポーションで自分の部屋まで転移した。

ちなみに、許可なくしては自分以外の誰も入れない、そして誰かが来たら自分に伝わるように魔法が掛かっている、誰かに物を盗られる心配もない。

そして、一日の授業の終わりを告げるチャイムが鳴ると同時に、

テレポーテーションとサモン・ファミリアの時に手に入れた能力の応用で、シエルのいるところに転移した。

正式なファミリアなら、修練次第でできるようになるらしいが、レイはそんなことをお構いなしにやってのけて見せた。

「ちよっ！それ、ここの制服じゃない！なんでレイがそんなもの着てるのよ！それに今日一日どうしてたのとか、いかにも重そうなの頭陀袋の中身はなんなの！」

「……………混乱状態の、ただでさえ頭の固いシエルに説明し、納得させるのは、校長たちを丸め込むより難しそうだ。」

第八話 事件の予感

それから、校長先生に頼んだら入れてくれたと説明し、「何でそんな勝手なことをするのよ!」とか言おうとするシエルを口をふさぎつつ、もう片方の手で翡翠のイヤリングをプレゼントし、かつEクラスに入ったから大丈夫だ、授業料とかは自分で払う。と諭すようにやく落ち着いてくれた。

「綺麗・・・ありがとう。大切にするね!」

いや、そんなきらきらした目で見られても。
大して高価なものでもないし、貴族のお嬢様ならこれぐらい持つてゐるだろ。

そう思ったが、口に出すほどレイは野暮ではない。

「それは良かった。さ、飯食って明日のクラス対抗戦に備えようぜ。もちろん、俺だつて出場するぞ」

途端に、大きくガッツポーズをするシエル。

さつきからどうやら、喜怒哀楽の表現が激しいようだ。

「ふふーん。それなら勝ったも同然ね。カケルとレイがいれば、最強よ。今年から四年間、優勝はもらった!」

いや、それまでずっとEクラスにいる気が、とか、クラス替えになった時に、都合よく同じクラスになれるとは限らないぞとか、ツッコミどころはあるが、あえてそつとしておくカケル。

「ツツコミ役、何か突っ込んでやれ」

「・・・ここは、そつとしておいてあげた方が」

こそこそとレイとカケルが話している間も、気付かず有頂天になつて、なぜか即興で踊り始めたシエル。

「・・・・・・・・あ。だな。シエルー。こいつを俺の部屋に一回案内するわ。お前は無理だが、まあすぐに戻す！」

「えええ！何で無理なのよ！」

「男子寮だからだ。以上」

「あんたが昨日いたのも、これからカケルが過ごすのも女子寮なのよ。いまさら問題は・・・」

「昨日はファミリアの扱いだったが、今は生徒だ。だから無理だなま、これからよろしく！ テレポーション」

転移しようとするレイを見て、慌てたシエルが、最後に聞き忘れたことがあるのに気付く。

「あ、ちよつとちよつと！そんなお金、どうやって稼ぐのよ？それにこの翡翠のイヤリ・・・ング・・・」

が、セリフの途中で、既にレイの姿は消えていた。

聞こえていたかわからないが、明日また顔を合わすのだ、それに

近いうち、ゆっくり話す機会もあるだろう――。

この時のシエルは・・・いや、誰もが、そんな時間がすぐには訪れないことを、知る由もなかった。

――

「・・・すげえ。真っ黒」

それが、部屋についたカケルの感想だった。
まあ、絨毯は黒、ベッドとクローゼットも黒。

座っているイスもまた、黒い色だった。

テーブルと壁、天井、ランプぐらいしか、他の色がない。

それも、木の色とランプの優しいクリーム色。

「ははっ。俺の好みだからな。私服も買ってきたぞ」

そう言って、レイが明けたクローゼットの中身は、見事に黒衣だらけ。

本当に、部屋着にパジャマに晴れ着と思しきものまで、真っ黒である。

「徹底してるなあ、ホント。何でここまで黒にこだわるのか、まだわからないな」

「黒のよさを分らないうちは、まだまだ子どもだな」

実はレイには、人には言っていない理由があつてのことなのだが、今後、言うとしても自分が過去から逃れられたときだろう。

「さて、何でいきなりお前、こんなものをそろえられるぐらい金持ちになったんだ？」

なんと主思いのファミリアか。シエルの聞きたかったことをそのままズバッと聞いていた。

「それはもう、傭兵ギルドに行つて稼いできたからに決まつてるじゃないか。火龍と暴青猪を狩つて、転移で護衛クエストをこなしてたら、いつの間にか金貨十二万枚稼げたぞ」

「それはなんというか・・・すげえな。モンスターハ○ターみたいじゃないか」

こういう時に、他に例えるこのできないのが、ゲーム脳と中二病にかかってしまった、哀れなケルだ。

「まあ、実際はもつと簡単に終わつたけどな。転移で一か所にまと

め、魔法一発で両方とも即死。後はモン○ンで言う素材をいくつか売って、稼いだ金で家具や、イヤリング、武器を買い、ここの授業料と賄賂を支払った、ってわけだ。じゃあ、俺は既に飯食ったし寝るぞ。明日は早いから気をつける。いつもと違って、早朝から始めるんだとさ。ここの生徒になった時について聞いておいた情報だ。確実だろうからシエルにも伝えといてやれ。エリシアにも。じゃお休み」

言うだけ言うと、そのままレイはさっきまで座っていたイスから立ち上がって、クローゼットからパジャマ、もといここでは寝間着を取り出し、着替え始めた。

「おいおい、俺をあいつの部屋に移で送ってやろうっていうサービスはないのか？女子寮までのこのこ歩いて帰れと？」

カケルがそう要望すると、明らかに面倒臭そうに大きく舌打ちした後、溜息を吐いて、「しまいに体なまるぞ・・・どうでもいいがな。テレポーテーション」

目の前がぐるっと回転したあと、カケルは後頭部に強い痛みを感じた。

ガツッ

と大きな音がして、やっと頭から床に落下したのだと気付いた。もちろん、レイの嫌がらせだろう。

あいつとは、今度みっちり友情について拳で語り合わないとな・・・と、勝てるわけもないのに、カケルは思わず考えていた。

ぶつけた頭をさすりながら、空いた手でドアを開け、食事前に授業の荷物を置きに帰ってきたシエルに、先ほどレイから聞いた話を、金を稼いだところの話から聞かせ、食事に行くのを思いとどまらせた。

「じゃあ、これから私も寝てるわね。カケル、あんた間違っても変な気起こすんじゃないわよ」

ハイハイ、じゃあせめてちょっと着替えでも覗かせて・・・

「あ、あとこれから着替えるから、入っていいっていうまで中入らないでね。覗いたら殺す」

・・・もらうわけにはいかなさそうだ。

それでも、ついつい誘惑に負けたカケルは、ドアを注視しながら寝間着に着替えていたシエルによって、半殺しの目にあつたとか。

第八話 事件の予感（後書き）

次回は、少しグロテスクな表現が入ります、そして展開が異様に早いです。
すみません。

第九話 クラス対抗戦

「皆さん！起きてください！これより、クラス対抗、Bクラス対Eクラスの試合を始めます！起きてください！」

校内放送で、BとEのクラスメートがいる部屋に、モーニングコールが響き渡った。

ほとんどのものが、規格外の時間から行われる試合にドタバタとしていたが、エリシア、シエル、レイ、カケル、そしてエリシアのファミリア、水精霊セイルは既に準備を終えていた。

「準備完了っ」と

レイは、昨日買ったばかりの追憶の剣に、自分の魔力を注ぎ込む。

本来なら魔剣に魔法の上掛けなんてできないのだが、レイが人外級の魔法を使えるのと、この世界の人々をはるかに超える魔力をもっているため（この世界、大気中に普遍する魔力の量は多いくせに、人が持っている魔力は少ない）硬化と再生力上昇、身体強化に魔力吸収の能力が付与された。

「時間もあまりないしな、剣はこんなものでいいか」

右に持ってきた刀、氷斬を、左に追憶の剣を持ち、普段着の黒衣を纏う。

もちろんのこと、今着ている黒衣にも、魔法反射、物理攻撃緩和、身体能力上昇、硬化、自然治癒速度上昇の効果が掛かっている。

「さて……。修行の始まりだ」

一人しかない部屋でそっとつぶやくと、不敵にニヤツと笑い、自室を後にし、闘技場へとレポートした。

「よし、今回こそBクラスに目にも物見せてやるわ。あわよくば、カケルの戦果を主である私のものにして、私の評価を上げる！もつとも、もう上位クラスに行く気はないけど」

シエルが、隣でカケルが痣だらけの体で、ミルクと黒パンだけの朝飯を食っていたが、それを気にも留めずに独白した。
カケルという最高に強いファミリアを召喚して以来、上級クラスに魅力がなくなった。

自分をバカにするものはカケルが返り討ちにしてくれるし、その被害者だらけの上級クラスになんて入れるもんですか、という考えに基づいている。

「私を、バカにした奴らに、今日こそ仕返しを……。！！」

先ほどのレイと同じく、ニヤツと笑うと、カケルを連れて、戦闘服に着替えてあるシエルは、闘技場へと歩いて行った。

「さあて、お手並み拝見と行きますか」

エリシアは、自分の相棒、セイルをなでながら、隣の部屋で盛り上がっているシエルつぶやきを聞き、こっそりため息をついた。

あの二人がいれば負けることはないだろうけど、自分にできることはやらないと。

「今年の優勝は・・・あたしたちのものよ」

そつと呟き、セイルを抱えて、エリシアは窓から闘技場のある方へと上級の飛翔魔法で飛んで行った。

――――

各自、部屋を飛び出してから数分後。

明らかにネグリジエ姿の生徒や、ろくに武器すら持ってきてなかったもの、パンを咥えながら試合開始を待っているやつ、なぜか後生大事に枕を抱えているアホなど、両クラス全員が集まった。

試合開始まで、ちょうど二分前だった。

「ではこれより、Bクラス対Eクラスの試合を始める。そして新しくEクラスに加わった者がいる。レイニイミヤだ。魔力測定も何

もしていないため、完全なダークホース。そのハンデとして、Bクラスに誰か援軍を一人迎えてもいいが、どうする？」

ちよ、そんな話聞いてないわよ！とシエルがわめこうとするが、BクラスのHR委員であろう、眼鏡をかけた、気障な奴が言った。

「そんなもの、必要ないね。高々Eクラス、その程度のハンデは、無きに等しい。このままで」

この瞬間、Eクラスの生徒、24人+1人の心が一つになった。

確実に、Bクラスのこいつをつぶす、という思いで。

「「ソーソー。雑魚が増えても話にならないし」」

「もう少しハンデがってもいいぐらいね」

眼鏡に追従して、そうだ、そうだ！の大合唱になった。

「はいはい。簡単にルールを説明するわね。一定量の攻撃を受ける
と、その人は闘技場から強制退場になります。だから、相手を殺す
つもりでかかってもらいません。じゃあ始めます・・・試合開
始！」

試合開始の、旗が降りた。

「はあっ！」

魔法を使わず、合図とともにレイが飛び出る。

残像を引くぐらいの速さで疾走しながら、追憶の剣を抜く。

「せいっ」

そのまま振りぬき、一番近くにいた一人目を消す。

その結果を見もせず、左足を軸に、寄ってきた女を右回し蹴りで蹴り飛ばす。

飛んで行った女を、追撃とばかりに遠隔攻撃で消し去った。

このころから、ようやく他の生徒が動き始めた。

もっとも、一番初めに動いたのはカケルというファミリアだが。

「罪人殺しの炎槍」

カケルの生み出した炎の槍が、三人の生徒にぶつかって、その姿をかき消した。

カケルはファミリアになったことで、この世界の魔法を使えるようになったっている。

その中でもカケルが気に入っているのがこの魔法だ。

「魔弾の射手：序幕」

伸ばされたカケルの右手から次々と魔法の弾丸が生み出され、Bクラスの残り19人に襲いかかる。

「『『聖なる光の守護よ、今ここに具現し、敵の攻撃から我が身を守れ。』
ホーリーシールド 聖盾』」

先ほどの眼鏡と、その腰巾着らしきアホ面が二人、魔法の詠唱を

終え、Bクラスの生徒たちの前に光るシールドを張った。

それに少し遅れるようにして魔弾が着弾し始める。

張られたシールドが魔弾を受け止め続け、ひびが入りかけたものの、何とかカケルの攻撃を防ぎきった。

「ははっ！ざまあ見やがれ・・・ッ！」

調子に乗った腰巾着の一人が、敵陣を蹂躪していたレイによって斬り消される。

「調子に乗るな、屑が。出直してこい！」

既に、24人いたBクラスのメンバーは、その数を既に半数以下に減じていた。

「く、くそっ！拘束魔法だ！この黒野郎を拘束しろ！」

眼鏡が新しい詠唱をしながら叫ぶのと、カケルの詠唱破棄の魔法が発動するのが同時だった。

「くらえや！魔弾の射手：弾幕」

先ほどに倍する量の魔弾が、連続して聖盾にぶつかる。

さっきの攻撃でひびが入っていた盾がこの攻撃に耐えられるはずもなく、あっさりと砕け散った。

「ちくそっ！得意じゃないが――」

先ほどの眼鏡に斬りかかったレイの剣が、初めて防がれる。

レイの斬撃を防いだのは、雷を固定した雷剣だった。

「甘いな。俺を止めたければこれぐらいやって見せろ！ 雷剣雨
！」

眼鏡の持つ雷剣を遙かに超える大きさの雷剣が上空にいくつも出現し、辺り一帯に同時に着弾した。

そのまま、空いた左手で氷斬を抜いて、一気に振りぬく。

体を輪切りにされるほどのダメージを受けた眼鏡の姿が、ぼやける間もなくたちまちかき消された。

残り、およそ5人ほど。

先ほどの雷剣雨によって、ちょうど防御魔法を唱えていなかった生徒全てが致命傷を負って消失したからだ。

「Bクラス舐めるな！ アイシクル・ワンハンドレッドミラー」

中級魔法の、完全詠唱破棄。

百の氷でできた鏡が、Bクラスの残り五人の前に並ぶように出現し、氷の槍が一斉に放たれる。

その時、Eクラスのメンバーの声が合わさった。

「『俺たち（私たち）を忘れてんじゃねえ！（ない！）』」

「「「「「」」」」」」

「ファイアボール」

「『我、ルシウスの名において具現せよ、鬼火』」

「・・・せよ。メテオ・インパクト！」

最後の魔法は、先ほどからシエルが唱えていた物だ。

派手に隕石を落とし、辺りをクレーターだらけにするはずのものだが、小規模な落石が発生し、何もない空中から落下した岩石たちが、残り五人に降り注ぐ。

「くそうっ！ アンチ・マジックシールド」

Eクラスの生徒の詠唱が終わり、次々と風によって作られた刃や、炎の球、氷の槍、雷撃などがBクラスの陣地に雨あられと殺到する。

最後の抵抗とばかりに、全ての魔法を反射する防御魔法、アンチマジックシールドを発動するぽっちゃり系。

Sクラスの生徒並みのその防御魔法自体は称賛に値するが、味方からの攻撃を巧みに避け、肉薄したレイの持つ追憶の剣の魔力吸収効果によって、シールド事吸収され、紙一枚の役にも立たなかったシールドもなくなり、無防備となったぽっちゃり系に身を切り裂いた。

その勢いで上昇し、上から遠隔攻撃で3人を吹き飛ばすと、地面に着地する寸前、真横に切り払い、最後の生徒を消し去った。

「勝負あり！勝者、Eチーム！」

無傷のEチームの生徒の歓声で、早朝の闘技場が一気に騒がしくなった。

珍しいこの結果に、先生たちも笑顔を隠せない。

平民の先生が基本、Eクラスの面倒をみることになっているが、貴族面した上級クラスの生徒に、かすかにいらだちを感じていた者も多かった。

その油断が、悲劇の始まりとなるまで、およそ二分前のことだった。

第十話 星屑ノ雨

「勝負あり！勝者、Eチーム！」

辺りに爆発的な歓声を巻き起こした、この宣言の後、Eクラスの生徒全員の生徒証が書きかえられた。

戦績記録のところに、Eクラス 完勝 対Bクラス

成績の欄のクラス対抗戦戦歴が0から一に変わった。

光り輝いたその生徒証を食い入るように眺めている生徒たちと、それを穏やかな目で見守っている先生たち。

そこに、突然空から何かが降ってきた。

「へえ。ここが噂のサンクアル魔法学院か。三人を除いて、魔力の量があまり無いように感じるんだが」

・

ものすごい速度で飛来したそれは、華麗に着地し、辺りに砂埃を撒き散らし、ついでに地面に巨大なクレーターを生み出した。

片手を地面に着いた状態で着地したそれは、ゆっくりと砂埃の中から出てきた。

綺麗な銀髪に、紅い目の整った顔立ち、そしてこの世界ではめつたに見られない、白いスーツ姿で現れたその男が、ゆっくりと口を開いた。

「まあいいか。初めましてー、僕の名前はラース・トランジスタ。魔族だよっ！人間の魔法使いたちを殲滅するために来ましたあ！他の学院一つぶしてきた後で疲れてるけど、よろしくっ！」

……一同、啞然。

あまりにも現実離れした事に、ぽかんとただ口をあけていることしかできなかった。

機敏に対応するべき、先生まで、だ。

今、呆けてないのは、カケルとレイ、予想外にもシエルだけだ。

たぶんシエルの方は、最近いろいろとありすぎて、精神根性逞しくなっているに違いない。

「じゃあ行きまーす。 呪歌の完全旋律^{フルメロディ}」

殺人歌の大合奏を遙かに凌ぐ効果範囲、即効性を持つ最上級魔法。

決して、単身でしかも完全詠唱破棄で発動していいものではない。

朗々と死の歌を歌い続けているラースだが、レイがそれを見過ぐすはずはなかった。

「舐めるな！ サイレント！」

詠唱中の魔法を全て無に帰す。

辺り一帯から音を消すこの魔法は、歌系統の魔法にも有効だ。

「へえ。それこの世界の魔法じゃないよね？ま、僕のもただごと。
ライトニングソードレインストーム
喰らえ、雷剣雨嵐」

「なっ！」

雷剣雨で生み出される雷剣の数は、およそ五十が限界のはず。

しかし今、闘技場を覆うように、半球状に展開された雷剣の数は、
およそ五百。

「いっけえッ突撃！」

ふざけたラースの号令のもと、その雷剣が生徒たちに向かって襲
いかかる。

耳を貫くような轟音とともに、スタングレネード三百個分ぐらい
はあるであろう閃光が、レイ達の眼を焼いた。

「ぐっ………！」

シールドを展開するのも間に合わず、既に我に返っていたものも

次々と雷剣の餌食になっていく。

もつとも、Eクラス程度の生徒の防御魔法では、紙切れ一枚以下の役にも立たないだろうが。

雷剣の嵐が収まった後に立っている人影の数は、五。

ラース、エリシア、カケル、レイ、セイル、だ。

近くには、先ほどまで穏やかな目で生徒を見ていた、女の先生が真っ黒に炭化して倒れていた。

それが誰なのか、レイやカケルには分からなかったが、相当人気のある先生だったらしく、その遺体にエリシアとシエルが駆け寄った。

「「メリィ先生！」」

急いでエリシアが治癒魔法を発動させる。

「『癒せ、癒せ、我の名において願わん。この願い聞き届けられるならば、この者の傷を完治させよ！この者の身体に具現せよ、コンプリート・セラピー！』」

全世界の強豪が集まる、世界魔法大会の主治医ですら、詠唱破棄では発動できないようなトップレベルの治癒魔法。

なぜにそんな魔法が使えるのにEクラスにいるのかは不明だが、それを以ってしても、メリイという名前の女教師は助からなかった。そつと瞼を閉じてあげる程度の供養も、炭化したメリイ先生にはできない。

「グスツ・・・安らかに眠れ、　ファイアボール」

エリシアの起こした火球が、メリイ先生の遺体を、静かに燃やした。

立ち上る煙をしばらく眺めた後、エリシアは泣きじゃくるシエルの隣に立ち、ラースの方を睨みつける。

さすがのレイも茫然としている中、とどめを刺そうとせずに待っていてくれたことについては、ラースに感謝するべきかもしれない。

・・・

「残念だったな、あいにく今は、生徒は誰一人死んじやいない。致命傷と判断される攻撃を食らえば、自動で転移魔法が発動し、各寮室に運ばれることになってるんだ」

静かな声音で、カケルが言葉を発した。

はっ！としたようにシエル達も我に返る。

ただ、さっきからずっと、レイは静かに瞑目している。

そんな中、でもな、とカケルの声は続いた。

「既に一人死者が出てるんだ、お遊びでは済まされないぞ、ラースとやら。こんなにみんなに慕われていた、よき先生を亡き者にした罪は……」

一端言葉を切り、ゆっくりと、かつ凄みを利かせた声で、最後の一言を付け加えた。

「万死に値する！！！！地獄に落ちろ、ファイアテンペスト！！」

憤怒の形相で、カケルが発動したのは、上級魔法の更に上を行く、炎属性の攻撃魔法。

沸き起こった灼熱の業火が、大嵐となって四方八方からラースの身を、怒りの炎で焼き尽くさんとばかりに襲いかかる。

「よくも……よくも、先生を！ サイクロン」

同じような顔をしたエリシアも、風の中級魔法でその炎を煽る。

新たに出現した竜巻が、炎を纏ってラースに直撃する。

爆音がし、大火力の魔法をよけようともせず食らったラースを包み込むように、爆発が起きた。

爆風でエリシアとカケル、シエルの体が大きく吹き飛ばされる。

ちなみにさつきからずっと、セイルが詠唱を続けている。

ドゴオオオオン！！！！

派手な音がして、三人の身体が壁に激突し、漏斗状の穴をあけた。それに対して、腹立たしいことに全くの無傷で、何事もなかったかのように歩み寄るラース。

「なるほどねえ！めんどくさいことになったな・・・仕事が増えちやったじゃないか。おい人間、まずはお前らを、転移魔法ごと消し去ってやるよ！」

ラースの全身から、銀色に輝く魔力があふれ出した。

誰がどう見ても、何かしら危ないことをしでかすのが分かる。

「させるか、バカっ！」

先ほどの爆風の中でも、ずっと同じ姿勢で瞑目していたレイが、カッと目を見開いた。

目に見えないほどの速さで抜剣すると、残像を引きながら斬りかかる――。

・ ・ ・ ・ ・
カケル、シエル、エリシアの三人に。

あっけなくレイの追憶の剣で切り裂かれた三人は、そのまま致命傷を負ったと判断され、部屋に飛ばされる。

「やれやれ、一瞬君が血迷ったのかと思ったよ。でもこれで、一番危険そうだったお前と、全力で戦えるってことだ。あんた、用意はいいか？」

「一つの文に、わざわざ三つも二人称を入れるんじゃない、バカたれが。命をかけた戦いの用意なんざ、この世界に来る前からできてる！——俺の大事な友人たちに、危害を加えようとしたその罪、お前の身を以って償ってもらおうか！ 常闇の洗礼！」

レイを起点に、真っ黒な影が数十本、上空に伸び、実体を持って、

槍のようにラース目掛けて落下する。

その結果がどうなったかを見もせず、鞘に戻していた追憶の剣と氷斬を抜いて、一気にラースとの間合いを詰める。

「せいやっ！」

追憶の剣が、左から真横に薙ぎ払われる。

さすがに余裕の表情を消したラースが、地を蹴って上へ飛び上がり、斬撃をかわす。

そしてそれを狙っていたかのように、上空から落下した影の槍が襲いかかる。

「貴様っ！魔族を舐めるなあああ！」

先ほどまでとは打って変わって、凶暴になったラースが、完全詠唱破棄どころか、魔法名すら言わずにシールドを発動する。

影槍が次々と半透明のシールドに突き刺さる。

が、もちろんそんな隙をレイが見逃すはずもなく、同じく地を蹴って翔け上ったレイは、氷斬を使って袈裟切りをお見舞いする。

それを卓越した反射神経で飛びのくことでかわしたラースに、今度は追憶の剣が突きだされる。

「いいっ！加減っ！鬱陶しいぞっ！」

次々と繰り出されるレイの斬撃を、自らの魔力を元に作った、光

剣で防ぎ、かわし、ある時は弾き返ししながら、ラーズはついにブチ切れた。

爆発的に高まった魔力の余波で、レイが空中から地面へと叩きつけられる。

とつさに地面へ向けて透明の衝撃波を放ったレイは、その反動でもう一度上空へと飛ぶ。

「黙れ！もう二度と俺は自分の大切なものを失う気はない。それに、お前はともに入らない、鬱陶しい、生理的に受け付けない！だから散れ！」

スターダスト・レイン
星屑ノ雨

レイの眼前に魔法陣が展開し、そこから流星が撃ち出される。

魔弾の射手、全弾発射を超える量の流星が高速で放たれ続け、ついにラースが新たに張ったシールドに、ファーストインパクトを果たした。

「くっ！」

数秒後、一向にやむ気配のない流星による攻撃に耐えきれなくなったのか、シールドがあっさりと四散した。

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオン!

そして、まだ百は残っていた流星が、リースに殺到し、大爆発を巻き起こした。

第十話 星屑ノ雨（後書き）

戦闘シーン、次回に持ち越しです。

レイ君が初めて本気を出し始めましたね！。

そして、レイの過去も少し、ほんの少しだけですが登場しました。
さてどうなるのやら。

感想、ポイント評価お願いします。

第十一話 魔弾の指揮

爆音と煙、エジソンあたりが見たら、豆電球と比べ、その強さのあまりに卒倒しそうな程の閃光がやむと、さすがに無傷とは言えないぐらい、全身に火傷と裂傷を負ったラーズが姿を現した。

「やれやれえ。結構やるねえええ！僕を本気で怒らせちゃったみた〜いい〜」

先ほどまでと違い、格段に彼の纏う魔力、殺気が上昇している。

「はっ、屑がどれだけ怒ろうが所詮、屑だ。やれるものならやってみろ！」

大瀑布にも等しいような殺気を浴びても、なお平然としているレイが、吐き捨てながら言い返す。

途端に、ラーズが纏う殺気の密度が、二倍ぐらいになった。

「いいだろう・・・やってやるよ！」

「それでいい・・・俺も行くぞ。初めから本気を出してればよかったのにな。それがお前の敗因だ。以上！」

二人の抜剣は同時だった。

漆黒と純白が、それぞれ残像を引きながらぶつかる。

目に見えない速さで、十合、二十合と打ちあっていく。

光剣と追憶の剣がぶつかるたびに、白銀の閃光が弾ける。

レイが、バク転で二転三転、強制的に間合いを採る。

「っらぁ！」

氷斬を抜き、上空に投擲すると、そのまま追憶の剣で、疾走して横に切り払う。

が、レイが薙いだのはラーズの残像で、本人はジャンプしてかわっていた。

そして、上から重力を利用した思い剣撃をレイに喰らわせる。

それを剣を地面と水平にして防ぐと同時に、上に投げていた氷斬が、ラーズの脳天を突き刺さんとばかりに飛来する。

それが横に跳ばれて避けられるのは、レイの予想の範囲内。

ブンツと蹴り足のかすむ勢いで、レイがでラーズの胴に回し蹴りを見舞う。

同時に、ラーズが光剣物凄い勢いで投げつけ、空いた両手で順番に正拳突きをレイの鳩尾に叩きつける。

「がはっ」

「ぐっ！」

二人とも、両サイドに吹き飛ばされ、壁に衝突。

ドガアアアアツと大きな音がして、先ほどのエリシア達が作った穴の二倍近くの範囲にわたって、罅などの傷を与えていた。

「ここではちよつと君に不利だね。正々堂々を信条とする僕が、落ち着いて戦えるところに移動してあげよう！」

ラーズが、数秒後、破れたスーツをはたきながら出てくると、何やら印を結び始めた。

そして、レイとラーズの姿が、闘技場から消えた。

闘技場には、たくさんのクレーターと、血の染みが残されただけだった。

転移で着いたところは、レイのよく知る世界――。

つまり、地球だった。

しかし、辺りに建っているビルは、どれも錆びついて廃墟と化し、動いている物など見当たりすらなかった。

「どう？ここは、君が元いた世界の、二百年後の未来。人類は宇宙に出て行ったのか、はたまた僕らみたいな魔族に滅ぼされたのか、日本には一人も残っていないよ。辛うじて生きている人も、遙か秘境で、細々と文明からかけ離れた暮らしをしているだろうね。何なら、もつと未来に跳んであげようか？どうなってるか、見物だねえ。世界だけでなく、時間も跳べるんだよ、魔族……の中でも、上位魔族は」

レイは、しばしの間怒りを忘れて沈思した。

今ここで、彼に逆らうのは得策ではないんじゃないか？もしかすると、元の世界に帰れるかもしれないし……。

「おい。ラースとやら。一つだけ質問していいか？俺を、そして翔を元の時代に帰すことはできるのか？」

「できるけど、やるはずないでしょ、一度はつきり『敵』に回った奴を見逃すほど、僕は甘くないぞ」

レイは、ニヤツと唇を釣り上げて笑った。

「ほう、じゃあ俺が勝ったら、元の時代に戻せ。それが無理でも、

俺を少しの間だけでもいい、あの時のあの場に戻せ。過去を変えてもいいなら、なおいいがな」

——そう、あの出来事を無かったことにするチャンスだ。他の何を犠牲にしても、手に入れられるなら逃すわけにいかない。

「いいよー。君が勝つことなんてまずないし、そもそも、君と戦うなら、どちらかが死ぬまで終わらない気がするけどね」

「なら言うことはない。良かったな、命は助かって！」

さつきを上回るスピードで疾走して勢いをつけ、上空に漂うラーズ目掛けて飛ぶ。

「喰らえ！」

今度は、レイの周りに青色の、拳ほどの大きさの魔力の塊がぐるぐると回りながら出現した。

しかも、その数がどんどん増えていく。百・・・二百・・・五百。

たらーっと、ラーズの額から汗が流れおちた。

レイが、オーケストラを指揮するかのようになり、手でリズムを刻み始める。

それに合わせて、十個ずつ、魔力の塊がラースに殺到する。

二十拍を指揮し終わると、レイが刻んでいるリズムが、四分の四拍子から、三分の三拍子、ワルツへと変わる。

残りの三百個が、一拍に月百個、同時に発射された。

「魔弾の指揮。俺のオリジナルだ」

今までで一番の破壊力を持った攻撃。

シールドを多重展開して何とか持ちこたえたラースも、魔力の消費が激しかったようだ。

既に、余裕はすっぱりと消え、ただ、その顔には怒りと憎悪の念以外浮かんでいなかった。

肩で息をしているラースに、駄目押しをするかのように、レイが厳かに宣告した。

「俺は、元いたところでは魔法に関して才能がない、魔力の量も百万と多いが兄みたいにバカみたいにずば抜けているわけじゃない、期待はずれだと、親戚や知り合い、その他大勢の大人にバカにされた。それが悔しくて、俺はまず独自に魔力の量を増やす訓練法を編み出した。大気中の魔力を、少しずつでもとりこみ、自分の物と一致するよう変換し、供給できるものを増やした。簡単にいえば、輸

血や骨髓移植見たいな方法だな」

レイは、全く表情を変えずに、感情も込めずに淡々と語った。

「それで、この世界に飛ばされる寸前の魔力量は、三百万だった。自分以外には測定結果を見せなかったから、俺の冷遇は治らなかった。同じ学校の生徒の中で、二位は五十万。カケルだ。兄でさえも二百五十万だ。その頃には十分、新宮家の中でもトップクラスになっていたよ。そしてこの世界に来た。ここでも同じように訓練を続けたさ。もともと、この世界の連中は生まれ持った魔力量は少ない、五桁台が最高、とか言うようなやつばかりだ。それでも大気中にある魔力の量は、日本とはこれまたケタ違いでな」

最後に、ふてぶてしい笑みを浮かべて、とどめを刺した。

「今の俺の総魔力量は、三億だ。魔力勝負なら負けんぞ！」

第十一話 魔弾の指揮（後書き）

あつれえ？戦闘終わるはずだったのに。
次回に繰り越しです……。

さて、気を取り直して報告。今回から次回予告を入れようと思います。

今日の司会者は、もちろんこの作品の主人公、レイ！
では、どうぞ！

レ「おい、何勝手なことをしてるんだ！今俺は戦闘で忙しいんだ！」
作「まあそういうなって、簡単に次回予告をしてくればいいんだよ」

レ「他の奴にやらせろ。じゃあな！」シュタツ（レイが逃げていく音）

作「待てえ！大人しく縄につけ！作者パワー舐めるな！」

ーレイ、突如空中に出現したロープによって行動不能ー

レ「汚ない真似しやがって。ああ、分かったよ。やればいいんだろやれば」

作「そ、じゃあ僕帰る。後は頑張れ！」

レ「……イラッ 魔弾の指揮」

ズガアアアアアアアアアン

作者、あっけなく昇て……

作「いやいや、まだ死んでないからね！しかもまだこの期に及んで諦めないレイ、いい加減に次回予告してよ、尺が足りなくなる！」

レ「意外としょぼい理由だな・・・しょうがない、やってやるとするか」

あのとどめのセリフの後、ついに本性をむき出しにした『憤怒』のラースが、ついに全力を出した。

そのあまりの勢いに押される俺だが、まだまだ負けるわけにはいかない！俺は・・・あいつの仇をとるまでは、死ぬわけにいかない！

次回予告

第十二話 蒼天に舞う紅い華

next time ,

see you

第十二話 蒼天に咲く紅い華

「今の俺の総魔力量は、三億だ。魔力勝負なら負けんぞ！」

レイの、眼前にいるラースを完全にバカにしたような笑顔での宣言を聞き、驚いたような表情になったラースだが、それも一瞬のこと。

「ま、良いけどな。お前ら、魔族っていうのは魔法に優れた種族のことだろう？ そうは見えないがな。魔法で戦うか？ 剣で戦うか？ 好きなのを選べよ」

戦う相手に選択肢を与えるのは、レイが何時もやっていること。

時にそれは、屈辱を与えることもあるし、相手の闘志に火をつけることもある。

今回は、前者だったようだ。

「っざけんなあああああ！ たかが人間風情が！ 威張り腐りやがつて！ 余裕のつもりか、貴様！ ああ、やってやらあ！ 俺の持つ魔力量はなあ！——六億なんだよ！」

レイの顔が、驚愕に彩られる。そこに、幾許かの「ちっ、まずったな」というような後悔が混じっていた。

ラースの纏う、魔力の色が、先ほどまでとは打って変わって、薄い赤から、深紅になっていた。

殺気の量も、また上昇している。並みの人間では、半径百メートル以内に入っただけで、失神するだろう。

突如、ラースの手に、深紅の槍が現れる。

なんと、柄の部分から穂先まで、全てが彼の魔力でできている。

つまり、伸縮自在、形状変化自在、かなり硬い、というような性能を持ったものということだ。

たぶん、エリシア辺りに持たせれば、一秒とたたずに体内の魔力が枯渇してしまうに違いない。

「つらあああああああああああああああ！」

ラースの雄たけびと同時に、レイの身体が勢いよく吹き飛ばされる。

「何っ！」

レイが、自分が槍で突かれた衝撃で吹き飛ばされたのだと認識した時は、既に二百メートルは飛んでいき、鉄筋コンクリート製のビルの壁を貫通した後だった。

見ると、氷斬の刃の部分が、半分ほど無くなっていた。

ラースの突きがそこに命中したらしい。

「ぐっ……」

ラーズの追撃を防ごうと、急いで起き上がろうとするが、全身に鋭い痛みが走る。

大怪我をして気絶した後、目を覚まして病院のベッドから跳ね起きたりする小説やドラマの主人公がいるが、レイが主人公を笑うことは、今後一切ないであろう。

何とか立ち上がったものの、全身から血がだらだらと流れだし、足元もおぼつかない。

視界にも霞がかかっている始末だ。

——これは、早々に決着をつけないとさすがにヤバいな。

レイがそんなことを考えていると、ラーズが穴を通ってレイの頭にかかと落としを食らわそうと飛び上がって飛来してきた。

「くそっ！」

何とかそれを一回転してよけるが、足元がふらつきそのままゴロゴロと転がって行ってしまう。

治癒魔法なんて使ってる暇はないな・・・。

「封魔結界」

苦し紛れにレイが発動したのは、陰陽道と呼ばれる、古来より伝わってきた日本の魔術。

魔法を使うものを倒すために、魔法を使うというのも変な話だが、とにかく魔力を持った対象の動きを封じる結果。

彼の安倍晴明もよく使っていたとされている魔術。

「こんなものっ！」

が、上位魔人相手には効果がないらしく、紙でできた檻を引き裂くかのように、青く輝く結界を一気に蹴破ってラースが現れた。

「ちっ・・・くそ！」

追憶の剣を、とりあえず振り回すレイ。

もちろん、傍から見れば素振りをしているようにしか見えないが、一回振ることに見えない斬撃が発生しラースを襲う。

なぜかそれらすべてを余裕で身を捌いてかわすラース。
キレた時の彼の強さは、平常時の何倍にも及ぶ。ゆえに、『憤怒』のラースと呼ばれている。

「おわりかい？口先だけは達者な癖にな」

「っまだまだ！」

こっそりとラースがしゃべっているすきに治癒魔法で傷がある程度回復させると、魔法で天井まで届く穴をあけ、高く高く跳躍し、そこで浮かぶ。

「さつさと消える！」

レイが持っている追憶の剣の輝きが通常の何十倍にも増して強くなっていく。

そして、もう視界全体が青い輝きに覆い尽くされた時、ついにレイが剣を振りおろした。

「アブソリュート・ブレイク！」

絶対の斬撃と呼ばれたその攻撃は、普通の見えない斬撃を遙かに上回る破壊力、命中力、伝播速度を誇り、防いだりよけたりすることはできない。

振り下ろしきるまでの途中に、衝撃波が目標に到達しているというようなものだ。

しかも追尾性能つき。

ズウウウウン

レイの叱声と同時にビルが完全に倒壊し、ダイナマイトで爆破したかのように、ゆっくりと地に沈んでいった。

「やったか・・・？」

レイの呟きに、呼応するかのように背後で殺気が立ち上った。

「惜しかったなあああ！俺ですら左の腕と足を犠牲にしなけりや助からないほどだったしな。まあ、今ので魔力はほとんど使い果たしただろうから・・・」

勝ち誇ったような顔をしているのであろうリースが、深紅の槍を右手で構えているのがわかる。

後ろを振り向こうとしたらその瞬間、ぐさりと心臓を刺されることが分かり切っている。

さすがに、レイの額を一筋の冷や汗が伝った。

「さっさと死ね！」

思い切り勢いをつけて、ひと思いに殺してやろうとばかりに、一端リースが下がって助走をつける。

「はあっ！」

「もらった！」

一瞬後、繰り出された槍を回し蹴りでへし折り、レイが手にした追憶の剣で、逆にリースの右肩を切り裂く。

「バカな・・・あれに反応できるはずが」

何かリースが呟いたが、ふと視線の先にある姿を認識して、押し黙る。

そう、リースと違い意識的に、全身を覆うように濃密な魔力を鎧

のように纏ったレイが、にやりと笑って立っていた。

「さーで、反撃と行きますか」

ヒュツと音が鳴り、一瞬でラーズの背後に回ったレイが、音速に近い速さでラーズの首筋に手刀を繰り出す。

それを目ではなく気配で感じたラーズが、前転してかわしていなければ、確実に頸動脈ごと切断されていただろう。

纏う魔力を鋭い刃のようにして叩き込まれた手刀によって切断されたラーズの髪の毛が、はらはらと幾本か宙に舞った。

レイはかわされたと見るや、コ○ンのキック力増強シューズをつけているかのような速さで、ラーズの顎を蹴りあげる。

「ぶっ！」

蹴りが見事に炸裂し、鼻血を噴き出しながらラーズが上に吹き飛ばぶ。

先ほどの約束も忘れ、止めを刺さんとばかりに、追憶の剣で首を斬ろうとしたレイの斬撃が、ぴたりと止まった。

ラーズもまた、深紅の魔力を同じように纏い、レイの斬撃を紙一重というところで防いでいた。

深紅の槍が、剣へと姿を変え、レイの身体を輪切りにしようと襲いかかる。

追憶の剣にチャージされた魔力と、純粹な魔力がぶつかり合い、火花を散らした。

が、二つの力は拮抗しておらず、追憶の剣の方が押されているため、火花の色は赤。

鏢迫り合いになった状態で、紅いスパークがぱちぱちとはじけ、蒼天を彩る。

まるで、静止画のように止まっている二人と、蒼天に咲いた、紅いスパークの花は、場違いではあるが、レイに花火みたいで綺麗だ、という感想を抱かせた。

突如、大きめの火花が音を立ててはじけ、それを合図とするかのように、お互い後方に跳び退る。

そしてまたぶつかり合い、十合、二十合と切り結ぶ。

最早一秒間に何回とも打ちあわされるその二人の姿は、もし観客がいれば延々と拍手喝采が鳴り響くだろうというぐらい、瞠目ものだった。

次第に防ぎきれなかった斬撃で、レイは頬の肉が裂け、ラースの腰から血が噴き出した。

先ほどとは違い、実体を持った鮮血が、また空を彩る。

両者とも、手、足、肩甲骨、背中、と時間の経過とともに、浅くはないけがを負っていく。

「これで決める！」

レイとラースが、一歩下がると、自分の出せる最大のスピード疾走し、渾身の一撃を放った。

閃光が走った後、つかの間の静寂が訪れる。

ドサツという音がして倒れたのは、黒い影だった。

「俺の勝ちだあああああああ！」

いまだに剣を放してはいないものの、脇腹を大きくえぐられ、内臓が正味見えるぐらいの深手を負ったレイが、あまりの出血と痛みで、思わず地面に膝をつく。

止めを刺さんと、ラーズが憤怒と違い喜色を顔に張り付けて、レイの首を水平に薙ぐ。

ブシャツと、少量の鮮血が吹き出した。

ただし、レイの首からではなく、ラーズの胸から。

レイが左手に持っている青い輝きが、ラーズの心臓を貫通し切っ先が十センチほどみえている。

ラーズの斬撃は、レイが思い切りぶ厚くした魔力の鎧を使い、脇腹からドバドバと血を流しながら、右手の指の腹で受け止めていた。ただし、少しだけ肉に刃が食い込んでいたりするが。

——少し失敗したな。まあ何はともあれこれで勝負はついた。

同じ過ちを繰り返すほど愚かではないレイは、ラーズの持つ深紅の剣を奪い取り、ぱいっと放り投げる。

主の手から離れた深紅の剣は、魔力を失い、そのまま光の粒子となって消えた。

「さて、俺がこの剣を抜けば、お前は死ぬ。その前に俺とカケルを、元の世界に戻してくれるとありがたいんだがな？何ならその汚れき

った命、助けてやってもいい」

無駄に剣を持った左手を動かし、余計な事をすればすぐにこの剣を抜いてお前を突き飛ばしてやるぞ、と脅している。

と、何が可笑しいのかラーズが哄笑し始めた。

あーっはっはっはっは！と狂ったようなラーズの笑い声が、晴れきった空に響く。

「甘い！当然答えは」

ゴボゴボツと血を吐きだしたラーズが、最後の力を振り絞って、言った。

「NO、だ！」

そして、にやりと笑うと、一言付け加えた。

「人間……一本、盗られたぜ」

最期のセリフを言い終えたラーズは、そのまま盛大に血を噴き出し、ゆっくりと目を閉じた。

レイも、地上に降り、ラーズの遺体をしっかりと魔法で消滅させておく。

夜に墓場で運動会を開かれるならともかく、後でゾンビよろしく「はい蘇りましたー」って襲ってきてはたまらない。

「はあっ・・・終わったか」

そしてレイも、テレポーターションで自室に戻ると、そのまま意識を失った。

第十二話 蒼天に咲く紅い華（後書き）

ラ「はい。やってきました、レースです！」

作「やー、いらっしやいいらっしやい。今日のメインゲスト、ラーズさん。ささ、ゆっくりしてって」

レ「は！？今死んだばかりのレースが、カケルやシエルを差し置いて何でここに！しかもゆっくりしてとか言いながら座布団出すな作者！」

作「さて、今回の解説から行きましょう」

ラ「今回は結構、ネタが入ってますねー。墓場で運動会って・・・何年前の（ピー）」

作「うるさいわ！この前、その関連のドラマがあっただけだから古くねえ！」

レ「何で早速解説に入っているのか気になるところだが、他にもいろいろと入ってたな」

作「ラ「たぶん分かる人にはわかるだろうけど、オリジナルのストーリーな小説なので許してください！」」

レ「黙れ、さつさと次回予告を終わらせて、俺は帰る！」

何とかレースを退けることには成功したが、闘技場はボロボロ、しかも魔族の脅威はまだ完全には去っていない、しかも死者も出ていると、かなり最悪な状況に包まれたサンクアル魔法学院。そんな中、さらに状況を悪くする奴が現れる――。

次回予告

第十三話 絶望への使者

u n e x t t i m e ,

s e e y o

第十三話 絶望への使者

「……………イ、レイ！起きなさい！」

気絶していたレイが、ゆっくりと目をあけると、そこにはカケルとシエル、エリシアの顔が。

そして白い天井と両隣のベッドを見て、どうやら保健室らしきところだと気がついた。

「つよ、よお……………どうしたんだ？」

体を起こそうとしたが、全身に激痛が走ったため、思わずうつと呻いてしまった。

「どうしたんだじゃないわよ！一人であのヤバい男と戦って、檻褌雑巾みたいに傷だらけで、一日中部屋から出てこないみたいだから、カケルを様子を見に行かせたら、血まみれのあんたが倒れてたそうじゃない！心配させて！目が覚めて一言目が、『どうしたんだ？』って！それはこっちが聞くべきことじゃない！？」

あまりの剣幕に、一瞬ギョツとなったレイだが、さすがに悪いと思っただのか、素直に謝る。

「す、済まない……………」

「返事はごめんなさい！でしょう！-」

「……………ごめんなさい」

シエルは、はあ、はあと肩で息をしながら、まだ怒鳴り足りないのか、大声を出そうと口を開いたところで、バタリと倒れてしまった。

「お、おい？本当にどうしたんだ？」

レイがらしくもなく慌てていると、カケルの生温かい視線を捕えた。

「・・・ちなみに、あれから既に三日が経過しててな、一日目はお前が倒れてて、残りの二日間、ずっとつきつきりで看病してもらってたんだぞ？ファミリアでもないのにな、うらやましいぜ」

嫉妬まみれのカケルの声に、思わず笑い声をあげてしまい、またその反動で傷口が開いたのか、レイがちよっと笑顔をゆがませる。

「つとつと。まだ安静にしてろよな。出血多量&全身打撲、さらには傷だらけで魔力も切れているときた。物凄く強いお前をここまで追い込むなんて、相当手ごわい相手だったんだな」

レイは、一瞬カケルに話してもいいものかと悩んだが、次の瞬間には話してしまっていた。

「実は、そいつが魔族と言ったのは本気でな、なんでも時間や世界を超える力を持っているらしい。つまり、俺たちを元の世界に戻すことができる奴、というところだな。実力も半端じゃなかったが、とりあえず魔族に頼んで帰してもらおうというのは無理だろうな、魔族の仲間を殺してしまったわけだし」

戦闘の経緯まで詳しく聞きたがったので、どうせならシエルも起こしてやろうと、エリシアが水精霊のセイルに頼んで、冷水をシエルの顔にぶっかけた。

「わひゃう！つめたっ！なななななに？」

突然のことにびっくりしたのか、大慌てで挙動不審に陥ったシエル。

それをどうどうと宥めた張本人のエリシアは、とりあえず隣のベツトに腰掛ける。

「さ、話してちょうだい。魔族と闘って死ななかったんだから、きつと勝ったんでしょ？その時の話を聞かせて」

三人にせがまれるままに、ポツリポツリとレイは話し始めた。

自分がやられてた時の話などは、あまり話したくなかったのだが、「うそやごまかしは無しの方で」とあらかじめ宣言していたので、しょうがなかった。

そして数分後。

「ほええ。やっぱりお前強すぎだろ」

「ちつ。カケルじゃなくてレイにしておくんだった」

「今からでもあたしのパートナーにどう？もう生徒になっちゃってるけど、普通に付き合ってくれればいいわよ」

最後にさらりとんでもないことを言うエリシア。

しかしそれをスルーしたレイは、話を締めくくる。

「で、今に至るっていうわけだ。良かったな、皆に転移の魔法が掛かってて。おかげで助かったんじゃないか？俺の場合は、さらに違うところに飛ばされたからうまく機能しなかったが・・・」

話しているうちに、保健室の先生であろうの方が飛んできて、怪我人は大人しく休ませてあげなきゃだめじゃないの的なことを、直立不動の三人と一匹にくどくどと話したりとか、助けを求めるような眼で見られたレイが、わざと寝た振りでごまかしたりとか、先生が去った後、三人がかりで文句を言われて、ついつい大笑いしてしまい傷口が完全に開いちゃったりとか、いろいろとあったが、割合穏やかに時間が過ぎて行った。

シエルの話では、あの後先生の葬式と、校長先生による全校集会、そして幾人かが退学した後、闘技場の修復作業が始まり、今は半分ほどが片付いているという。

TPO的にはあまりほめられたことではないが、患者のいる保健室での、ワイワイとした時間は、皆の最近のつらい出来事やゴタゴタを、一時的に忘れさせてくれた。

……が、そんな時間は唐突に終わりを告げる。

「へえ、ここがラーズが任務に失敗して死んだところか。とりあえず確認しておこうかな」

謎の人影が、皮肉にもラーズとまったく同じところに着地し、思いつきり伸びをした。

第十三話 絶望への使者（後書き）

今回は短いです。

明日が何分、合唱コンクールなもので。

第十四話 傲慢なる矜持（前書き）

前回は、次回予告もすっぱかしてしまいました。

本当に申し訳ありません。

では、今日の分もどうぞ！

ちなみに、合唱コンクールでは金賞とれました¥（ハ。ハ）ノワイ
イ

第十四話 傲慢なる矜持

さて、謎の侵入者が出現する数時間前。

・・・・・・・・

国中で、大災害が相次いで引き起こされた。

『疫病、地震、落雷、火事、水害、おやじ・・・次々と起こる天災』！

そういつた注意を喚起するような、チラシがひらひらと風に乗って窓の開いていたレイの病室に舞いこんできた。
ちなみに、もうシエルたちは十分ほど前に帰っている。

「へえ・・・ここも今は大変なんだな」

まあ、この魔法学院は周りを結界が覆っているから、かなり安全と言えは安全だ。

この世界の魔法知識と元の世界のを組み合わせで作った、魔法陣

をうつすらと学院の周りに書き、レイが張った結界と、現存する魔法使いの中で、皇帝の次に強いという学院長のシールドで、二重に護られている。

「とりあえず、もうあといくつか、防御策を施しておくか・・・ってん？」

一瞬、物凄い大瀑布の水圧にも等しいようなプレッシャーが、レイを襲った。

つい少し前に戦ったラースごとときと違い、もっとレベルの高い、強い人間・・・というより魔族。

「・・・ちつ。また魔族か。どぞのホグな魔法学校みたいに、目くらましの陣を後で張っておいた方がいいか？校長の許可とって」

豪快に舌打ちすると、レイは窓から、プレッシャーのものとの方に跳んだ。

いつも通り、恐怖やためらいは・・・ない。

空中で華麗に一回転すると、姿を消し、透明のまま闘技場に入った。

これで魔法は使えない、攻撃を食らってもアウトだが、見つからずに接近するのが今回の目的だ。

こっそりと侵入者を視認できる位置に近づくと、そこにいたのは、一人の少年。

「初めまして！僕の名前はプライド。あだ名だけどね。本名はないな・・・あつたとしても忘れちゃった。君がラースを殺した本人かな？」

これまた流れるように綺麗な銀髪に、嘘くさいほど整った容姿の、小柄な少年。

いかにもファンタジックな服装で、赤のマントと紫のレザーアーマーのようなものを纏っていた。

これならただ、「イケメン皆、地獄に落ちるがよろし」だが、その全身から常に放出されている、禍々しいほどの殺気、そして圧倒的なほどの気迫、というより眼に見えない「気」のようなものが、近づくものに、そんな軽口を聞けなくさせる。

そして何より重要なのが、透明化にはもう気付かれているということ。

さすがに、突然こんな独り言を言い出すような人はいないだろうから。

しかも駄目押しのようにレイの隠れている方を睨みつけている。

「ちっ。さすがに見つかったか」

見つかったと気付いた刹那、魔法を解いてダッシュしたレイは、一気にプライドとの間合いを詰める。

そして、一回軽く跳躍すると、一回転してひと思いに斬り下げる。その間身動きすらしなかったプライドは、傲慢なまでに笑顔を崩さない。

よけようとすらしなかったため、そのまま一気に切り裂かれる――

――かと思いきや、なんと魔剣を肩で止めていた。

厚さ一メートルの鉄でも切り裂けるような魔剣を、眉一つ動かさずに肩で受け止めたプライドは、ひょいっと手を動かす。

とつさに危険を感じたレイが後ろに跳びのく。同時にプライドが生み出した光の鞭が、一瞬前までレイの頭があった部分を超高速で通過する。

たぶん当たったら、その場で首が千切れ飛んでいただろう。

にこやかな笑顔のままそんな攻撃を次々と繰り出してくるプライドの姿は、とてつもなく恐ろしげだったが、レイは心地よい緊張感しか感じなかった。

そして鞭の射程外に出た途端、見えない斬撃をこれでもかとはかりに連続で繰り出す。

右、左、ななめ、下から上へと、手がぶれるような速さで剣を振るレイの姿は、同じく高速で鞭を動かすプライドと、拮抗しているように見える。

しかし、プライドがいまだに無傷なのに対して、かわしきれなかった鞭がレイの頬を裂き、腕に傷を作る。

「ちっ・・・」

このままではやがてやられると思ったレイは、追憶の剣に魔力を流し込み、一気に前に突く。

範囲のある今までの攻撃と違い、攻撃の範囲は狭いものの、破壊力と貫通力は、槍の穂先のような形に形成された、今の見えない斬撃の方が圧倒的に高い。

「っらああ！」

時に首に迫りくる鞭を防ぎ、斬り飛ばしながら見えない斬撃を放ち続ける。

一方で、魔力を形にした鞭を使っているプライドも、流し込む魔力の量を増やし、鞭のリーチをより長くする。

最早今の二人は、動いてない顔と胴ぐらいしかまともに見ることすらかなわない。腕や足が消えたように見えている。

ぴたりと、突然プライドの動きが止まった。

そして、退屈そうに溜息などついている。

「へえ、そこそこやるね。でもまだまだかな。ほら、僕まどろっこしいことが嫌いだね。君の持つ最高の攻撃を仕掛けてきなよ。僕も相応のお返しはするから」

「いいだろう。その前に一つ聞いておく。お前の狙いはなんだ？ ラースみたいに学校ごと魔法使いを殲滅する気はなさそうだが」

「ああ、もちろん——」

そして、最高の笑顔を浮かべたプライドは、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「君を、同胞を殺した君に、仕返しをするためさ！」

途端に、笑顔のまま物凄い殺気を放出するプライド。

「面白い。やれるものならやってみてくれ！ 得物創造」

レイが、自らの魔力を具現化させ、目の前に大量の槍、剣、短剣を、全ての切っ先をプライドに向けて出現させる。

素材は、全て鉄。

「お前は知ってるかどうかわからないけどな、『レール・ガン電磁波砲』っていうのがあってな。金属に物凄い電気を流し、高速で撃ち出すんだ………こっぴつ風にな！」

雷剣雨の電圧すべてをそれぞれの武器に流し、超高速で撃ちだす。この前ラースと戦った後、自分の火力を上げるために考えたもの。あらかじめ強度と魔力吸収能力を付与しておいた武器を、ポケットに手を突っこんだまま微動だにしない傲慢のプライドの方へと幾十本。

プライドもそれに対抗するかのよう、何も詠唱せずに障壁を張る。

「まだまだ！ 荷電粒子砲」

魔力を使って、大気中の元素を数百億の素粒子に分解し、光に近い速さでプライドの方に飛ばす。

「！」

レール・ガンの第一波が、プライドのシールドを大きく揺さぶる。そしてシールドが赤く輝いたかと思うと、そのままあっさり碎けた。

その後の荷電粒子砲がプライドの全身を貫く。

血まみれになった自分の身体を見下ろしながら、驚いた表情でゆっくりとプライドが顔面から地に倒れる。

「やれやれ・・・思ったより雑魚かったな」

剣を鞘にしまい、ふと辺りを見回すと、あちこちに何かで抉られたような跡が。

「・・・修復するか」

何やらレイが詠唱するにつれ、壁につけられた傷が消える。

数十秒の詠唱が終わると、元通り綺麗になっていた。

そしてプライドの遺体のある方を見ると・・・・・・・・

そこには、何もなかった。

「！・・・・・・・・幻術か。厄介な敵が出てきたものだ」

途中一回攻撃がやんだ時に、幻術で生み出した幻を残し、自分は転移して消えたんだろう。

あっさりだまされるなんて、俺もまだまだだな、とレイは吐き捨てた。

とりあえず侵入者は撃退したとばかりに、レイは自室に戻った。

そしてテレポーションでレイが消えた後、ひょっこりと透明化を解除したプライドは、その場で大笑いした。

「自分はいさりと透明化の魔法に引っかかるとはね・・・ま、幻術を使っただけというのを見破ったところまではほめてあげてもいいかな。でもまだまだ僕の敵じゃないよ、レイ。強くなって、僕に追いついてこい」

クククツ・・・と不気味に笑いながら、プライドは今度こそ本拠地に転移した。

最後に、闘技場に声を響かせながら。

「実は、僕は魔族でもラースが嫌いだね。あいつを殺してくれたのはいい。でもレイ、今の君がもつと強くなってから、倒してあげよ・・・魔族としての、矜持がやられっぱなしを許さないから」

第十四話 傲慢なる矜持（後書き）

プ「やあ、こんにちわ皆さん。プライドです」

レ「だから！何で毎回敵キャラばかり出てくる？？？シエルとかはどうした！」

作「あー、ちよつと誰かさんの看病に疲れて、お休みになっているから呼ばなかったんだよ」

レ「ぐっ……」

プ「で、僕が何者なのか、気になってるんでしょ、レイ君」

レ「別に……」

プ「連れないねえ。こんの無愛想で唐変木で頭の固いアホが。まあいいよ。まあ君が強くなったときにまた現れるよ。アディオス！」

レ「あ、ちよつと待てコラ！」

作「あーあ、行っちゃった、全くレイはバカなんだから」

レ「っ……気分が悪い、さっさと帰らせてもらっ」

さて、プライドは去ったが、敗北の事実は、俺を大きく揺さぶった。

そこに舞いこんできたのが、強化合宿という、他の魔法学院の優秀な生徒も合わせて二週間ほど、魔法やその他もろもろの強化を行うという名前通りのもの。

その行事に参加できるのは、学年でわずか十人。全百人ぐらいの一年の間で、壮絶な予選が幕を開ける。

次回予告

第十五話 敗北の爪痕

next time ,

see you

第十五話 敗北の爪痕

「ちつ。面倒なことになりやがったな・・・」

部屋に戻ったレイが、思わずといった感じで溜息とともに吐き出した。

確信はないが、このところ起こり続けている天変地異も、あいつらが関わっているんだろう。

偶然で片付けるにはあまりにもタイミングが良すぎる。

まあ、何が起きても返り討ちにしてやるだけだが。

俺は復讐を果たすまで、死ぬわけにはいかないんだ、ととうにした決意を再確認するレイ。

「復讐はむなしい・・・か。分かってないやつ言いそうなことだ。むなしいと分かっているけど、やらずにはいられないんだよ・・・まあ、分からない方がいいんだが」

ボソツと独り言を言いつつ、夕食を食べに行った。

また色々と騒がしいんだろうな、と思いつつ。

案の定、お世辞にも静かとは言えない食堂だったが、皆の話の内容はレイの予想とは大きく違っていた。

闘技場での騒動についての話だと思ってたのだが、見事に外れていて、うるさい会話の中身は「強化合宿」だった。

「強化合宿？」

レイは、とりあえず隣にいたエリシアとシエルに聞く。

この二人とカケル、の三人と飯を食べるのがレイの日課となっている。

「うん。なんか他の魔法学校の生徒とかの選ばれたメンバーと一緒に、魔法についての強化を図るみたい。で、この学年からも十人が出るんだけど……」

「で、誰が選ばれるかで盛り上がってる、と。なんかその予選だけでも、生徒の励みになりそうだな。それねらってるんだとしたら、厚かましい校長だ」

レイが大きいため息をつくと同時に、シエルがあたふたと周りを見回す。

誰かに聞かれたらコトだからである。

「まったく……心臓に悪い」

ぶつぶつとシエルが文句を言っているが当然スルー。

三人とも完全に何も聞こえていないかのように振る舞っている。

その間に話を聞いたところによると、参加者は学年中でトーナメントをやるらしい。

そこでの十位までが参加できるんだとか。

「あ！お前は！」

見覚えのある誰かが絡んできた。

確か、初日に叩きのめしたギリオールとか言う名前の屑だった気がする。

「そつか。大変だなそれは。で、シア（エリシアのあだ名）は誰が選ばれると思うんだ？」

「さあー？当然レイは選ばれるでしょー？後はSクラスのメンバー九人全員かな？Sクラスだし。カケルはどう思う？」

「もちろん、同じくだよ。俺も出られるんなら出たいけど」

「ちょ、僕の話を」

「出られるんじゃないか？カケルなら。あー、シエルが強くならいと無理か？」

「私だつて強いわよ！ファミリアの強さは主人の強さにもなるんだから！」

「そこで自分自身が強いって言わないのがシエルらしいわね」

「うるさーい！」

てくてくと、空いている席めがけて歩いていく一行。
ギリオール某は放置されている。

「・・・・・・・・」

「あはははは。でもカケルだけでも戦えるでしょうに、十分」

「そうだな、お前を少し鍛えてやってもいいぞ」

「マ・ジ・デ！」

バカ話をしつつ、空いている席を見つけて座る。

何気にギリオールとははるかに遠い席だった。

「いつか、倒してやるぞ。カケルとやら・・・」

だから、恨みのこもった声でギリオールが呟いたのを、聞き逃してしまっていた。

第十五話 敗北の爪痕（後書き）

次回予告はお休みします。
ネタが・・・。

第十六話 バトル・ロイヤル―自分達以外はみんな敵―

今、レイたちは地獄を味わっている。

いや、正確にはサンクアル魔法学院の生徒全員と、約一名以外の先生全員が、と言っべきか。

「……………えー、ですからして、えー、この強化合宿は、えー、非常に価値のあるものなのです。えーよって、選ばれた生徒のみが参加できます。あーっとだから、参加できる生徒を選ぶ予選を行います。えー皆さん、頑張ってください！」

長い……長いよ校長のスピーチ……。

どこの世界でも校長の話が長いのは同じなんだな。

「だつりい……」

そしてそんな長い校長の話が大っきらいなカケルは、既に姿勢を崩していた。

ファミリアだからとがめられることもない。

レイは、立って目を開けたまま、精神統一をしていた。

エリシアは、近くの女子とおしゃべりに興じている。

実質、真面目に聞いていたのはシエルだけだった。

そして、ようやく終わったかと思えば。

「次は、教頭先生のお話zzz」

また話が長い教頭が出てこようとしてきた。

いい加減疲れたカケルが、こっそりと催眠魔法　コール・サンドマン　で司会者を眠らせた。

「おい！何を居眠りしておるか！」

・・・しかし教頭は止まらなかった。

「ええい、まあいい！聞け、みなのも」　コール・サンドマン
zzzzzzzz

次はレイがより魔力を込めて催眠魔法を使用した。

そして拡声魔法をかけようとした体勢のまま、教頭もぐっすりと眠りこむ羽目になった。

「「「あ、あれあれあれあ？」」」

校長も泡を食っているようだが、他の先生方はどこかホッと胸をなでおろしたようだ。

「まあ、とりあえず予選、開始だ！・・・と言いたいところだが、少しだけルール改正がある」

セリフと共に生徒会の顧問で、男勝りな女性教師、ミネルバが前に進み出た。

「予選は今回、トーナメントではなく、バトルロイヤルで行う！」

途端に、どよめきが辺りを支配した。当然のことだとレイは思う。
が、しかしその状態が一秒も続く前に、ミネルバが一喝した。

「うるさああああい！いいから予選開始だ！後十五分以内に闘技場に行ってなかった奴は強制不参加だ！」

「「氣い短かつ！」」

レイとカケルが突っ込んだ。

同時に、鬼の形相と化したミネルバが、杖を振りまわす。

慌てて生徒たちが闘技場に向かって駆け出した・・・いや、逃げ出した。

とりあえずいつものメンバーで、テレポーションし闘技場に行った。

「試合開始！」

テレポーションすると、やはりレイたちが一番乗りだった。

それから続々と生徒が走ってくる。そしてちょうど十五分後。

何時の間にかミネルバが、闘技場において号令を始めた。

ちなみに、この時点で足の遅かった生徒十人が落第している。

「行くぜ！」

「手加減なしだ」

「本気で行かせてもらっよ」

「行くわよっ！」

「……やる」

こうして、苛烈な戦いが幕を開けた――。

第十六話 バトル・ロイヤル〜自分達以外はみんな敵〜（後書き）

レ「今日のゲストは誰かな？」

シエル「はい、シエルです、よろしく願いします」

レ「まともなのがやつと来た・・・」

作「そうだね。そろそろ新キャラ出さないとこっちが追い付かぶがほあっ・・・」

レ・シ「そっちの都合をこっぴつとこで話すな！」

作「・・・すみませんでしたあ！」

レ「にしても・・・予選の通過人数制限、カケルは人数に入るのかな？一応人間だけど」

シ「分からないわね・・・一応人間だけど、ファミリアだから入らないんじゃない？」

レ「やっぱりそう思うか。一応人間とは言え、やっぱファミリアだしな」

？「一応一応言うな——！れっきとした人げ（？の人には字数制限あり）」

ー遠くから声が聞こえてきたー

レ「何か声が聞こえたような・・・ま、次回予告終わらせるか」

シ「そうねー。よろしくー」

総計九十人が、東京ドームぐらいの広さの闘技場で一斉に戦いを始めた。

それも、「自分達以外はみんな敵」（バトルロイヤル）ルール。

俺は当然、シエルとエリシアと三人で組んで闘うが、Sクラス全九人の強豪と謎の女子、そして怒りにまみれたギリオールが立ちはだかる——？。

次回予告

第十七話 熾烈な節

next time ,

see you

第十七話 熾烈な篩（前書き）

うっわ、ゲームにはまりすぎた・・・。

一回、好きなものを寄せ集めて二次創作作ってみたいな、と思う今日この頃です。では、どうぞ！できれば評価と感想お願いします。

第十七話 熾烈な節

「はあっ！」

合図と同時にレイが追憶の剣を袈裟切りに繰り出す。

見えない斬撃を使ったその攻撃で、二三人がまとめて吹き飛ば

そして詠唱を破棄した生徒たちの魔法によって、闘技場内は混沌に陥った。

あちこちで火の手が上がり、かと思えば氷によってかき消され、雷や風も乱舞している。

「面倒くせえ！ インフィニティ・スリープソング」

うつわ、禁呪なんか使いやがって・・・と思ったのはレイだけ。当然ながら。

元の地球では、広範囲にわたって聞いたものを眠りに陥れ、それで眠った者はまず十年ぐらいは目覚めないという。

ただし効果発揮まで時間がかかるのが欠点だ。

ちなみに、効果対象は自分で選ぶことができる。

「なんかまずい感じがする！」

そう叫んだ誰かが、炎の槍をカケルにぶつけようとする。

それを見たレイが、魔力吸収能力のある追憶の剣で炎槍を真つ二

つにする。

返す刀で近くにいた生徒を吹き飛ばすと、攻撃を放った張本人めがけて雷撃を無詠唱で放つ。

それも、数十発ほど。

「んなっ・・・！」

それをもろに食らった生徒は、大きく弧を描いて場外へと飛んで行った。

この試合では、ダメージは吹き飛んだ時の速さと飛距離であらわされる・・・つまり、傷は負わない代わりに簡単に吹き飛ばされて場外になる、というルールらしい。

その時、膨大な量の魔力がこちらに向かってくるのを感じ、慌ててレイが追憶の剣を軸に、魔力吸収シールドを張る。

「「「「「「「「「「
我らが敵に雷束を」 「「「「「「「「「「

九人分の魔力が合わさった複合魔法とは言え、半端ではない威力の直径が五メートルはある太い雷撃がシールド展開とほぼ同時に放たれる。

バッチバチバチバチィッバチバチバチィ！

静電気の発する音を何千倍にも大きくしたような轟音が耳を貫き、まばゆい閃光が目を焼く。

シールドに雷撃が直撃し、さながら鏢迫り合いのような状況になる。

シールドの耐久力が勝つか、雷撃の破壊力が勝つか――。

「んなにつ！」

結果、レイのシールドは数秒間雷撃を受け止めたものの、魔力の吸収限界を突破して、赤色に変色、あっさりと砕け散った。

「ちっ！
アースウォール
土壁」

シールドが破壊される寸前、今度はレイが両手を合わせてパンツと音を鳴らすと、闘技場の地面に手を当てた。

とたんに地面が盛り上がり、壊れたシールドの代わりに雷撃を受け止める。

土属性が雷攻撃を無効化するのは周知の事実。

しかしあまりにも強大すぎる破壊力が、その土の防壁をこれまたあっさりと打ちやぶる。

「カケル！この雷撃を発生させた奴に向かって攻撃してくれ！」

「委細・・・承知！」

力強いカケルの叱声と同時に、三本の炎槍が具現し、一直線に今も必死で雷撃を生み出し続けている生徒たちにぶつかる。

「まっだまだあ！」

今度は二連続で 罪人殺しの炎槍 が発動し、計六本となった炎槍が先の三本と合わさって、一斉に九人の生徒、おそらくはスクラスのメンバーに襲いかかる。

「ちっ！」

刹那、スクラスのメンバーの意識がそちらにそれる。

「今だ！」

レイは迷わず上空に跳びあがり、そのまま落下時の加速を利用した重い一撃をスクラスの中でも一番体積のある巨漢な生徒にお見舞いする。

そしてその結果も見もせず、右から左へ、上から下への斬撃を次々と繰り出す。

追憶の剣の前に間合いとか、そういった概念は意味を成さない。よって何とかかわしたり防いだりできた上位クラスの生徒の何人か

はともかく、近くで野次馬的に見守っていた生徒たちは巻き添えを食らってあっけなく場外へ。

効率よく敵を減らしていくレイの剣舞に、うまく乗せられようとしていた矢先……

ドスッ ドスッ

飛んできた三つのナイフが、シエル、エリシア、カケルの背中に突き刺さった。

第十七話 熾烈な節（後書き）

レ「おい作者、この展開はどうなってる！」

作「んなもん話せるわけないだろ」

レ「ちつ。今回はゲストが誰もいないじゃないか」

作「だね、ナイフ刺さっちゃってるし」

というわけで次回予告

俺が剣をふるっていると、魔法に特化した分、近接戦や気配を読んだりといった技能が今一つなシエルたちに、ナイフが突き刺さった。

はっとして振り向く俺に、ギリオールとSクラスの攻撃が襲いかかる――。

次回予告

第十八話 冷酷に飛んで行ったネジ

next time ,

see you

第十八話 冷酷に飛んで行ったネジ（前書き）

これからは、不定期更新になるかもしれません。

数少ない貴重なお気に入り登録してくださっている方々、誠に申し訳ありません。

突然更新が止まっても、お気に入り登録は消さないでください or z。

よろしく願います。ではどうぞ！

第十八話 冷酷に飛んで行ったネジ

「う．．．」

「がはっ」

「ちっ」

軽いうめき声をもらし、三人が同時に軽く吹き飛ばされる。

しかし、場外にはならなかったため、悠々と立ち上がる三人。

「いきなり背後から攻撃とは卑怯だね。どこのどいつか、面拜んでやろっじゃないの」

「よくもやってくれたね！」

「痛いな、こらっ！」

ナイフの飛んできた方向を睨みつけて怒声を上げる。

が、突如として三人の身体がフラツと揺れ、そのままバタンと前に倒れてしまった。

「．．．な．．．」

その光景を見て、くっくくくと笑いをこらえきれずに哄笑している貴族っ子が一人いた。

もち、前にカケルにさんざんにやられたはずの、ギリオールである。

「カケル！エリシア！シエル！」

普段は冷静なはずのレイも、さすがに慌てたのか戦闘中に三人の方を振り返る。

同時に、魔力を少し解き放って、辺りにいた生徒を見えない斬撃を応用した衝撃波で弾き飛ばす。

「くっ・・・ハハハハハハハハ！」

どこか狂ったように笑い声を上げるそのギリオールの姿は、レイの眼にも不気味に映った。

「ああ、良い気味だ！ナイフが刺さったことによる怪我は魔法が肩代わりしてくれるが、傷口から侵入した毒は防いでくれまい！」

どうやら、魔法防御の穴をうまくついて、ナイフに仕込んでいた毒が、三人を今のような状態に至らしめたらしい。

「この毒の魔法を我が物にするのに、ファミリアを脅し、図書室の禁書を読み漁った苦勞が報われた！」

この時、彼がもしいくらかでも落ち着きがあれば、レイの雰囲気ガラッと変わったことに気付いたはずだ。

今のレイの眼は、普段とまったく違いどこまでも冷徹で、かつ見る者が思わず圧倒されてしまうほどの怒気がこもっていた。

そこに幾許かの悲しみも混じっていることに気がついたのは、エリシアぐらいだった。

そう、先ほどまで倒れていたはずの三人は、すでに誰かの手によって治療されていて、解毒も住んでいる。

が、怒りに燃えるレイは気付かない。

あまりの迫力に、ギリオールとレイと離れたところで戦っている生徒を除き、その怒りは誰もが身を持って感じていた。

思わず、シエルが一步後ずさる。

「へえ・・・お前、最低な奴だな。言い訳文句一切きかん、今すぐぶち殺してやるからな」

どす黒い殺気を纏ったまま、レイがギリオールめがけて疾走する。抜剣と同時に閃光が走る。

もちろん、輝く魔剣をレイが神速で振りぬいた所以だ。

魔法吸収能力を強化し、防御の魔法ごと切り裂かんばかりに、ギリオールに迫る。

しかしそれでも、ギリオールの狂ったような哄笑は止まらない。むしろさらに頭のネジが飛んでいったかのように、冷え切った笑い声は一層激しさを増していた。

「アハハハハハハハハハ！」

「死ねえ！」

レイが、狂ったギリオールの首を刎ね飛ばす、その寸前。

「やめて！」

シエルの心底おびえたような声が、レイの熱く激した心をなだめた。

「んな！」

シエルの声が聞こえたことに、一瞬驚いたレイだが、振り返って彼女らの無事を確かめる。

「ちっ！」

叫びにこたえて、首の皮一枚のギリギリのところで剣を止めたレイだが、シエルがホツとしたのもつかの間。

「命を助けたやったんだ、これぐらいはやられて当然と思え！」

踏み出した左足を軸に、ブン！と風を唸らせて回し蹴りを放つ。

「アハハハハハハ！がはっ」

レイの蹴りは、ギリオールの子尾にクリーンヒットして、ありえないほど高くまで弧を描いて飛ばしていった。

ギリオールはダメージ肩代わり＋普通の蹴りの衝撃で、人間が蹴り飛ばしたとは思えないほどの高度から落下し、闘技場の観客席を一部破壊した。

それでも最後まで、アハハハハ！と不気味な笑い声の残響が聞こえていた。

「大丈夫か!？」

それを確認すらせず、慌てて三人に駆け寄るレイ。

「大丈夫だつて。しかしお前がそこまで俺たちのことを気にしてくれてたとはな」

からかうようにいったカケル。

「うるさい!」

「この場面でふざけるんじゃない!」

「ついでに私も」

「レイさんがせっかく心配してくれてるのにからかうなんて・・・最低っ!」

その結果、照れ隠しとして蹴りを入れたレイ、エリシア、シエル、事情を知っているその他近くにいた生徒にフルボッコにされたのは言うまでもない。

「はっ!」

そしてこの戦いの趣旨を思い出したレイが、衝撃波を発生させ、残っていた人たちを吹き飛ばす。

その瞬間、笛が鳴り響いた。

「やめえええええっえええええ! 予選終了だ!」

その時に立っていた生徒は、レイ、エリシア、シエル、あとSク

ラスの生徒五人、貴族だけどこか爽やかな雰囲気のあるアレイスターⅡヴァンⅡクローハイム、そして寡黙な碧色の髪に翡翠色の眼を持った、美少女、クレア。

ちなみにカケルはふっ飛ばされたものの、一応ファミリアだったためしばらくして戻ってきて、誰も何も言わなかった。

そう、「大丈夫か？」とかの一言ですら。

第十八話 冷酷に飛んで行ったネジ（後書き）

レ「新キャラ二人でできたな」

作「うん。名前の由来は気にしないで・・・」

レ「どこかで見たことあるな二人とも。まあ気にしたら負けか」

作「そーそー、とりあえず自己紹介しておいたら？二人とも」

クレア「・・・初めまして」

アレイスター「お、自己紹介か。初めまして。アレイスターⅡヴァン・クローハイムだ。これからよろしく頼む」

レ「この二人はレギュラー化するのか？」

作「主要人物には入る・・・かな？分かん」

ア「それはひどい！ぜひレギュラーにしてくれ」

ク「・・・どうでもいい」

レ「まあ何はともあれ次回予告だな」

ファミリアを召喚できないという制約があるため俺は使い魔を持つことはできない。

しかし俺は、サモン・ファミリアの儀式と元の世界の召喚魔法を組み合わせて、呼び出した魔獣や精霊を使役することができるようになった。

強化合宿の参加条件にファミリアを使役することも含まれているが所以だ。

そしてこの強化合宿でも、俺はまたトラブルに巻き込まれることに・・・。

次回予告

第十九話 強化合宿 初日

see you next

t
t
i
m
e
,

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3588q/>

blackboy・familiar～黒衣の使い魔～

2011年2月8日22時45分発行